

悪食女と美食竜

あかいかあ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

足を骨折した男がいた。

入院中、隣の部屋にモンハンをプレイしている人がいると気づく。
壁越しのマルチプレイを経て、いつしか2人は出会う。

そして、風が吹き、2人の運命は変わる。

2人が選んだ結末と、その結果は、モンスターハンターの世界への転生となり、2人
はそこで生きて行く。



月曜日以外の投稿になります。
出来る限り毎日を目指しつつ、その内失速するつもりです。失踪するつもりはありませんので、あしからず。

↓↓↓↓↓↓

書きだめしてから投稿しますので、しばらく休載させて頂きます。失速です。

2017/10/27

目

次

プロローグ

プロローグ 1

プロローグ 2

プロローグ 3

プロローグ 4

サバイバルの始まり

第一話 31

第二話 42

第三話 51

第四話 60

第五話 71

第六話 79

一幕 第九話

一幕 第十話

一幕 第十一話

一幕 第十二話

一幕 第十三話

一幕 第十四話

一幕 第十五話

一幕 第十六話

一幕 第十七話

一幕 第十八話

一幕 第十九話

一幕 第二十話

一幕 第二十一話

150 142 134 124 115 105 97 89

プロローグ 1

一緒に死んだ。

練炭とガムテープ、自分の車、そしてライター。この4つを揃えて、山の奥地で。俺は彼女の一緒に死んだ。

動機はある。

「治る確率は極めて…今の…技術では…」

医師が彼女のいない場で、両親に伝えた言葉である。

彼女が重い病に伏した事、底の見えない医療費の為に死にもの狂いで働き、微かな希望にを見ていた彼女の母が鬱になつた事。

繋がるようにして、その二人の面倒を見る父が限界を超え、娘の事さえ忘れた、狂い人となつてしまつた事。

彼女にとつて、不の連鎖はこのように見えた。

「私の所為なの」

病に伏した事が全ての原因で、彼女自身が元凶だと彼女は考えた。

そして、彼に對してこう言つた。

「きつと治らないから。終わりにする。」

～～～～～～～

俺は彼女を愛している。

この世の何よりも大事にしている。

それこそ自分の命よりも。

そんな愛しの人は、今俺の隣で悲しそうに前を見ている。

そりやそうだ、今から死のうってんだから。

2日前、彼女は終わりにすると言つた。

俺はわかつていた。そして頷いた。

俺に身寄りは無い。無いと言うのは語弊があるが、俺にとつて肉親などいない。

捨てられた身だ。施設育ちというやつだ。幼い頃に捨てられ、最初に顔と名前を覚えたのは、施設のおばちゃん。

愛してもらえたのかもわからない。実際幸せではなかつた。ただ、おばちゃんの作るご飯はどれも美味しかつた。

中学を卒業して、おばちゃんのツテで仕事を紹介してもらつた。基礎コンクリートを

打つ仕事、いわゆる土方である。

人と話すのは苦手なのに、現場の親方はわからんことは聞けと言う。グイグイ来る。どうしようと悩んでいるとなぜ聞かないのかと叱られ、最後に「勘でやれ」と言う。

仕事を変えようにも、辞めます。の一言が言えないままに三年が過ぎた頃、仕事中に脚を骨折した。一週間の入院生活の幕開けだ。

正直嬉しかった。冷房の効いた病室で一週間とは、まるでバカンスだった。

＼＼＼＼＼＼＼＼

入院して1日目、DSを開いた。

唯一の娯楽のモンスターハンターダブルクロスである。ただ、モバイルルーターは持っていないのでオフラインだけど。

正直下手だ。オンラインでやっていた時によく見た名前の隣の王冠は、ほとんど他プレイヤーの力で付いたようなものだし。

一週間暇なので、”アル”と名を付けたサブキャラを作つて一から始めることにし

た。

全てソロ、一週間でHR解放まで進める事が出来れば俺の勝ち、出来なければ俺の負け。

＼＼＼＼＼＼＼＼

4日目、G級ババコンガに三乙を貰い、DSを閉じ、イヤホンを外した。悔しいなあと天井を見ていると、隣の病室から何やら音楽が聞こえる。

すぐにわかった。タマミツネの戦闘BGMだ：

と言ふことは、隣の部屋でもモンハンをやっている人がいる！気づいた時にはナースコールを押していた。コミュ症なのを忘れて。

なんとか看護師さんに事情を説明し、看護師さんは隣の部屋へ行つた。

数分後、看護師さんさ一枚の紙を持って、「この紙を見ればわかるはずですって」

と言つて俺に小さなメモを渡した。

小さなメモには、

「部屋を作つて頂けますか、ローカルで入室しますので。よろしくね。」
とあつた。ソロ攻略の縛りを忘れ、と言うかその縛りを辞めて、部屋を立てた。

~~~~~

「ミツネが入室しました」

最初の出会いはこの一言。一言というか、一文と言うか。

武器は双剣、防具は天眼一式に業物。

そして、女性キヤラ。

本当に来てくれたと、俺は嬉しい思いでいっぱいになり、定型文にあるのにわざわざ手入力で

「よろしくお願ひします」

と送つた。

「よろしくね、ミツネです」

「こちらこそ、アルです」

「私、マルチは初めてで…」

「ローカルだし、ゆつくりで良いですよ」

そこからはゆつくりながらも、たくさんのクエストとチャットを楽しんだ。  
ソロ縛りを辞めた事から、入院の経緯までチャットで話し、次の日にまたマルチをする約束をした。

流石に施設育ちの話はしなかつた。

ただ、その中でミツネが言つた、

「私、結構こここの古株なんだよ」

が少し気になつた。

＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼

六日日の夜、HRの解放どころか、HRは100を超えて、名前の隣には小さな王冠が付いている。

ちなみに、ミツネは勲章をコンプリートしており、名前の隣には赤王冠が輝いている。  
いわゆる、完全クリアである。ソロで。

彼女は異常なまでに上手かつた。スタイルは全て使いこなし、被弾を見たのは初めて一緒に行つたクエストのババコンガでの一度きり。それも俺が盾コンを彼女へ当ててしまつた事から起き攻めを食らつた事だけ。

それ以外はノーダメージでクリアする。

回避性能を持つてゐるとは言え、攻撃を掻い潜つて舞う様に戦う姿には美しさすらあつた。

防具は天眼意外持つていないそうだ。

一度、火力盛りの装備などいろいろと作つたそうだが、全て売つたらしい。  
なぜ？と聞くと、天眼一式が一番好きだから。らしい。

ちなみに、俺は火力に貢献できないので、サポートライトやサポート片手でチミチミ戦つた。

／＼＼＼＼＼＼＼＼

ミツネと、アル。

美しく攻める、ミツネ

陰でコソコソと動く、アル

二人のハンターは、まるで長年のダッグの様な連携で狩りを楽しんだ。  
お互ひは、お互ひの本当の名前を知らない。



# プロローグ 2

彼女の名前を俺は知らない。

俺が座っているベッドの背中側の病室317号室。そこに彼女はいる。つまり、廊下へ出て名札を見ればすぐにわかることだ。

だけど、少し気が引けて見ない。

ミツネはミツネ。それでいい。

＼＼＼＼＼＼＼＼

7日目の朝。

今日は退院の日だ。13時に親方が迎えに来てくれる。なので、いつもより早く8時からモンハンをする約束になつていて。8時ちょうど前、部屋を立てて待つているとミツネが入室して來た。

「おはようございます」

いつも通りの挨拶をした。今日は何を狩りに行こうか。

しかし、いくら待つても返事が来ない。いつもならマシンガンチャットが始まるのだけど。

「おーい、ミツネさん？」

どうしたのかな、お見舞い客でも来たのかな。

～～～～～～

ナースコール！

二人の合言葉である。最初はふざけてつたチャット定型文だったのだが、今ではクエスト中に現実で何かあつた時の為の定型文になつていて。

クエスト中に検査の時間になつたり、お見舞い客が来たり。そんな時にお互い「ナースコール！」とう送る様にしている。

これが案外便利だつたりする。

～～～～～～

気長に彼女からのチャットを待つていると、DSからチャットが届く音がした。

「アル、私の病室へ来て」

今までに無い内容の言葉だつた。

「どうしたの？いきなり」

「今日退院でしょ？だから」

「わかつたちよつと待つててね」

退院すれば一緒にモンハンは出来なくなる。当然の事だが。ミツネのお見舞いへは行くつもりだし、もちろんDSを持って行く。それでも、今まで四六時中遊んでいたのだから、寂しいのだろう。

これも何かの縁だ。行つてみようじゃないか。

松葉杖を突き、病室を出る。隣の317号室へ向かうが、名札は見ない。そして、扉を開け、名前を呼ぶ。

「ミツネ？」

「アル？」

産まれて初めて”アル”と呼ばれた。そりや俺にも名前はあるけど、意外と”アル”と呼ばれたことに違和感はなかつた。

「初めましてどうも、アルでそす」

「あはは、そつか！挨拶は初めまして、になるんだね。なんだか不思議〜。あ、初めましてどうも。ミツネです！」

チヤツトでは見えなかつた彼女の喋り方、声、抑揚が新しい情報として入つてくる。もうちよつとおしとやかな人かと思つていたが、随分と天真爛漫な子だな。

「じゃあ一狩り行こうか。」

ミツネの姿はカーテンに遮られて見えない。ただ、画面にはいつものミツネがいる。  
それで充分だ。

／＼＼＼＼＼＼＼＼

1時間程だつたのだろうか。世間話とモンハンの話、病院食がまずいんだなんだ、そんな話をしながらモンハンをして、いつの間にかミツネのお見舞いの話になつた。

「本当に来てくれるんだよね？」

「もちろん」

「本当の本当に？」

「本当の本当に。」

「お見舞いなんて言い方するからなんか堅苦しいんだよ。だから、お見舞いなんて言わずにさ、俺はミツネの所に遊びに来るよ。これならなんか来そうだろ？」

「あはは、何それ～～

そんなに心配しなくても良いのになあ。

その時だつた。

扉も、窓も閉めた部屋に、風が吹き、カーテンを揺らした。

その隙間から見えたのは、深くニット帽を被り、優しい目でこちらを見ているミツネ

だつた。

目が合うと、彼女は直ぐに俯いて、そのまま幕を落とす様にカーテンは帰つて來た。

「見た？」

「見た」

「あーあ、バレちゃつたよ〜。私の顔」

「ミツネは綺麗な人だね」

「い、いきなり何を？おだてたつて何も出ないよお？」

「いやいや、本当にそう思つたよ」

「もう…」

少しの沈黙。お互いのDSから集会酒場のBGMが流れる。

「本当はね、退院だからってアルをこの病室へ呼んだけど、別の理由があるの。」

「私と実際に会つて、お話して、そうすればアルの記憶にちょっとは私を残せるでしょ？」

そして、情けでも良いからアルにお見舞いに来てもらいたかったの。」

「情けなんてかけないよ」

「アルは優しいから、きっと来てくれる。わかってるんだけど、どうしても会いたかつ

た。」

「そつか、なんかありがとうな。俺もあえて嬉しいよ。」

ミツネは突然カーテンを開けた。きよとんとする俺を見て、帽子を外した。

全て抜けている訳では無い。ただ、若い女性にはありえない程の毛髪の少なさ。医学には詳しく無いが、ミツネがそれほど強い薬を投与されている事だけはわかつた。

「そんな顔しないでよ。今はこんな頭だけど、お医者さんは良くなるって言つてたよ。あと1ヶ月もすれば外を歩けるつて。だからそんな顔しないで。」

俺がどんな顔をしていたのかはわからなかつた。

そんな話をしていると、病室へ看護師がやつて來た。ミツネの検査らしい。

ミツネを見送り、自分の部屋へ戻つた。

一人になつてから、初めて自分が動搖している事に気づいた。

ミツネの病氣。

ゲーム越しでは見えなかつた、現実だつた。

気づけば13時を越え、親方が迎えに來た。

~~~~~

プロローグ 3

結局退院の日、ミツネに別れの挨拶を出来なかつた。

心残りだつたが、遊びに行けば良い。彼女は治る。そう言われてゐるみたいだし。
↓↓↓↓↓↓↓↓

退院から5日、今は仕事に出でている。仕事と言つても、現場に出る訳ではなく、事務所の書類整理や掃除をしている。

随分ギプスと松葉杖にも慣れ、今日は午前のうちに作業を終える事が出来た。親方へ連絡をして、帰つて良いと言葉を貰つたので、ありがたくそうする。

そして、午後は決まつてゐる。
ミツネに会いに行こう。

鞄へDSと貴重品を仕舞い、タクシーに乗つて病院へ向かう。

前は隣の部屋だつたのに、今では随分遠くなつてしまつた。

↓↓↓↓↓↓↓↓

317号室。俺の相棒のいる部屋。

「おーい、ミツネ？ いるか」

カーテンの方からガサッと音がして、続けて彼女は言つた。

「アル!? 来てくれたの!?」

「約束だもんな」

「やつたあ!!!」

「病院だぞ、静かに」

「えへへ、ごめんごめん」

「そんなに騒ぐ事か?」

「だつて嬉しいもん、私、アルのこと大好きだし。」

…?

ホワツツ?なんですか?

「いま、なんておっしゃいました?ミツネさん。」

「二度も言わせるかなあ、アルさんや。大好きつて言つたんだよ。」

「あ、は、はい。」

ははは、と笑いながらミツネは話始めた。

「あのね、もし、本当にアルが来てくれたら、告白しようつて決めてたの。」

「告白…ですか…?」

「うん。ダメだつたかな？」

春だ。春が来た。

苦節18年。モンハンという種は、チャットにより発芽し、今、花開いたのだ。

「ダメじゃ無いよ」

「ミツネのこと大好きだし。」

「…へ？いま、なんておっしゃいました？アルさん」

「そのままの意味だよ」

「やつたあ！！」

「静かに、病院だぞ」

「えへへ、ごめんごめん」

たくさんの人々がいろんな形で出会つて、映画を見たり、ご飯を食べたりして、告白をして、恋人になる。様々な形があるのだろうけど、俺とミツネは、集会酒場で出会つて、いろんなマップに狩りへ行つて、築いた関係である。周りから見ればズレているんだろうけど、どこにいても楽しくて、いつも最高のデートをしていたと思う。

こうして、モンハンカツプルは誕生した。



季節は変わつて秋。

ミツネに初めて会つたのが夏の初めてだつたから、大体3カ月が経つたのか。2カ月前辺りに足のギプスも外れて、今では入院前の様に親方にドヤされながら働いている。ミツネの所へ遊びに行くのは大体週に2・3回。この3カ月は一瞬の様に過ぎた。

最近は全力で採取ツアーを楽しむという狩りを楽しんでいる。全力で採取をして、アイテムのレア度をそのまま点数にして勝負する。話をしながら結構楽しい。

ミツネは手に力を入れられないと言つていた。従つて、高難度なクエストに行つても、脳の指示通りに指が動かない。俺も悩んで、その末に出した答えが採取ツアーで勝負する事だつた。

ミツネの両親にも何度か会つた。

気さくな二人で、ミツネと、その両親、俺の四人で、彼女の病室でお茶を飲みながら話をしたりする。連絡先も交換した。

ただ、最近は二人とも元気が無い。今日は一人で来たのかな？奥さんがいない。今は、眠つてしまつたミツネの隣で、彼女の父と話をしている。

「アル君のおかげで、あの娘もなんだか元気になつたよ。ありがとう」

彼女の父は、感慨深そうに言つた。

「いえいえ、俺の方こそミツネから元気をもらえてますよ。」

「そうか、君は優しいんだな。最初、あの娘から病院にすごく良い人がいる。と聞いた時は何者かと思ったけどね。一緒にゲームをしてくれて、とても楽しい！と話すあの娘を見ていると僕や妻もなんだか嬉しくてね。本当に感謝しているよ。」

「そんな、頭を上げてください。感謝をしているのは俺の方です。彼女おかげで今とても幸せなんですから。」

そう言うと、彼女の父は力強く俺を見た。

「アル君。君は、あの娘の事をどう思っている？」

うつ、怖い質問だ…でも、ここは引いてはならない。

「愛しています。」

父は少しだけ笑顔になる。

「良い答えた」

「ありがとうございます。」

「そして、君になら話せる。」

「はい、なんでしょう？」

父は床を見て、落とす様に言つた。

「あの娘はもう永くない。」

「え？」

「何も言わなくて良い。ただ、あの娘が愛する君だ。知つていて欲しい。そして、あの娘もきつと気が付いている。自分の時間がもう短い事に。」

父は続けて話す。噛み締める様に。

「俺だけなんだ。今動けるのは……。妻は家にいる。鬱病だよ。ミツネの病状が悪化した頃から様子がおかしくてね。先日診てもらつたらそう診断された。」

何か言いたいが、言える言葉が見つからない。

父は、一層強く、まっすぐな眼でこう言つた。

「このままじゃ僕に何があるかもわからない。もし、僕に何か会つたら、君があの娘を助けてあげてくれ。」

「はい」

それしか言えなかつた。

↙↙↙↙↙↙↙

あの話をした後、家に着き、DSの電源を入れた。“HR250 アル”ミツネと共に育てた大事なキヤラだ。

立ち回りをミツネから教わり、今では超特殊許可クエストもソロでやれる。流石にミツネよりはタイムも遅いし被弾も多いが、成長したなと思う。でも今日はそのままDSを閉じて、眠つた。

目が覚めた頃には朝だつた。頭が回らないが、一先ず仕事の準備をして、水を飲む。忘れていいれば良いのに。

そう思つたが、昨日のミツネの父の話はしつかりと覚えている。準備を済ませて、車に乗り、職場へ向かう。気分は乗らない。

昼休憩。

秋の乾いた風が吹いた時、携帯が鳴つた。
ミツネの父からだ。

「もしもし、アル君？」

「はい、どうしました？」

「アル君、今から病院に来れるかい？」

嫌な予感がした。

「どうしたんですか？」

「ミツネの容体が急変した。」

次の瞬間には動いていた。競馬新聞を読んでいた親方に、「どこ行くんだ！」と怒鳴られたが無視した。

嫌だ、嫌だ、嫌だ！

タクシーを捕まえ、病院の名前を伝える。

永遠の様に思える車内で、ミツネの事を考えた。

プロローグ 4

集中治療室

そう書かれた扉の向こうにミツネはいる。

その扉の外にあるベンチに彼女の父はいた。俺も隣へ座る。

「あの娘と、約束したことがあるんだ。」

突然、父はそう話始めた。

「約束ですか？」

「そう。約束。：あの娘は君の本名を知らないんだ。」アルとは呼んでいるけれど。

「教えていませんから。俺もミツネの本名を知らないので。二人のジンクスみたいなものです。」

「そのことなんだよ。約束とは。君とあの娘が出会った頃かな、あの娘から、「もしアルに会つても、私の名前を教えちゃダメだよ！ いつか、私の口から教えてあげるんだ！」そう言われてね。青春だなあなんて言いながら、約束したんだ。妻も一緒にね。」

「それで、”あの娘”と呼んでいたんですか」

「その通りだ。」

「なぜ今それを教えてくれたんですか？」

「あの娘が君に名前を告げずに逝つてしまつたら悔しいだろう。」

「まだ逝くとは決まっていませんよ。それに、ミツネが元気な時に聞きます。モンハンでもやりながら。」

「強いね、君は」

今日やけ一日が長い。ずっとミツネの事を考えているが、ミツネはどんどん俺から離れて行く。

／＼＼＼＼＼＼＼＼

外はもう夜だ。蛍光灯の下で二人、時を待つ。

そして、シミや傷の位置を全て覚えてしまった集中治療室の扉が開いた。
「お父さんですね、こちらへお願ひします。」

医者が父へ声を掛け、父はゆっくりと立ち上がった。

「アル君。君も来なさい。」

驚き、ゆっくりと彼女の父を見る。

一つの感情もない、座つた眼でこちらを見ている。

「わかりました」

~~~~~

レントゲン写真や、健康週間のポスター。よくある医者の部屋。

「手は尽くしました」

「ですが、今の技術では……」

医者がいろいろ言っているが、何も頭に入つてこない。隣で拳を握る彼女の父が、聞いた。

「それで、あの娘はどうなんですか」

医者は変わらない口調で言う。

「保つて、後2日でしよう。」

それだけは、はつきりと理解できた。

そして、感情が溢れ出し、涙となつて流れ落ちた。

「ああああああああああああ!!!!」

突然、彼女の父が大声を上げた。

「終わりだ!!!全部終わり!!!クソッタレ!!!」

医者も俺も驚いてしまって、一瞬動けなかつたが、何とか話かける。

「ミツネはまだ生きています！お父さん！まだ生きています！」

そう言うが、聞こうとしない。そして、俺を見るなり

「君は誰だ!?なぜここにいる？ミツネ？誰だ？ミツネとは誰だ？…………そうだ、家に妻がいるんだ。愛する妻が。僕はなぜこんなところにいるんだ!?」

理解が追いつかない。

彼女の父が発狂していると気づいた時には、父は部屋から飛び出していた。  
追いかけようと思つたが、隣にいた看護師に止められた。

何もできない。無力。

そう思つて、看護師に聞いた。

「どうしたらいいですか？」

看護師は一度目を瞑り、言つた。

「彼女に会いますか？」

＼＼＼＼＼＼＼＼

わけのわからない機器が取り付けられ、ミツネはそこにいた。やつれている。

「ミツネ…」

呼んでみるが、返事は無い。ただ、人口呼吸器の音だけが響く。

なぜこうなったのか。

良くなると言っていたではないか。

父が戻つてこない。どこへ行つたのか。

＼＼＼＼＼＼＼＼

朝だつた。

椅子で寝てしまつた俺に、毛布がかけてある。病院の人に迷惑を掛けてしまつたな、  
そう思い、畳んで椅子へ置いた。

「おはよう。アル。」

後ろから、そう聞こえた。

細く、細く、消えそうな声だが、忘れる事の無い声だつた。  
ミツネの声だ。

薄く目を開け、顔をこちらへ向けて、悲しさを含んだ笑顔のミツネがいる。  
「ミツネ、起きたのか。おはようさん」

できる限り、今、俺ができる限り、いつもの様に話しかけた。

「ごめんね。アル。」

ミツネの近くへ行き、床に座り、彼女の顔を見る。

「ほんとにごめんね…。アル。」

呼吸機の音の隙間から、彼女の声を聞く。

「謝るなよ。悲しくなる。」

「えへへ、いつもの、アル、だあ。」

「おう。」

いつもの俺。そのつもり。

「パパ、行っちゃつ、たね。」

昨日の事だ。発狂した彼女の父の事。

「聞こえてたのか。」

「うん。全部、知つてる。ママの事も、私の、残つてる時間、の、ことも。」

「……」

「ねえ、アル。」

「ん? どうした?」

／＼＼＼＼＼＼＼＼

ねえ、アル。聞いて。

私、考えたの。

なんでこうなつたんだろうって。

そしたらね、わかつたの。

全部：

最初からぜーんぶ……

私の所為なの。

だから、

きつと治らないから。終わりにする。

／＼＼＼＼＼＼＼＼

2日後、俺とミツネは、死ぬ。

# サバイバルの始まり

## 一幕 第一話

見慣れない場所に居る。

ゴツゴツとした石畳の廃墟の様な場所。

少し混乱しているが、なぜか気分は落ち着いている。

目の前には法衣を着た白髪白髭の老人が立っていた。

「目が覚めたかの、少年」

「どこだここは？車の中じやないのか？ていうか死んだんじやないのか？」

「死んだんじやぞ」

「おお？俺の考えてる事が聞こえてる？」

「うむ」

「あ、えっと、すみません、ここはどこですか？」

「リアクションが薄いのう。少年よ。」

「まあ良い。とりあえず、少年、君は死んだのじや。」

「あ、はい。」

「での、ワシが此処へ呼んだのじや。」

「じゃあ天国…？自殺だから地獄か。

「どつちでもないんじやよ。此処は。とりあえずワシの話を聞いてくれるかの？説明するからの」

…はい。

「まず、此処は天国でも地獄でも、君たちの言う現実でもない。君たちからするところの別世界じや。での、普通はどこの世界で生を終えても、各々の世界でまた巡り巡つて生を受ける。輪廻転生つてやつじや。それはイメージ出来るかの？」

よくあるやつね、はい。

「じやが、様々な世界の中でも時折極大な力を持つ者が現れる。普通はその力を制御するのじやが、今回はちと話が違う。」

と、言いますと？

「ワシの納める世界で、極大な力を暴走させおったやつがおる。それも、他の世界へ干渉するほどにの。そして、干渉してしまつた結果、変わつてしまつたモノがあるのじや」

それが何なんですか？

「運命じやよ。お主らの世界のな」

運命…ですか？

「君たちの運命に、我々の世界が干渉してしまったのじや。君たちが死を選んだ事に、こ  
ちら側の責任があるのじや。」

「あなたの所為で僕らは死んだと？  
「端的にはそうじや。一つ、君たちの世界で起こり得ない出来事があつたのを覚えてい  
るかの？」

色々あつたので、さっぱりわからないです。で、あなた方の所為であるのならもしか  
して生き返つたり出来るんですか？元気なミツネに会えるのですか？  
「待つておくれ、そこも説明するからの。今話に出た、ミツネ殿の話じや。君たちが初め  
て会つた時に干渉は起きてしまつたんじやが…」

初めて会つた時…起こり得ない出来事…

あ…

風…風が吹いた。扉も窓も閉めた部屋で。

「そう。その時じや。その時にワシの世界では暴走が起きた。その余波はお主らの世界  
へ及び、それによつて弱つていたミツネ殿の病にまで降りかかつたのじや。」

…ことは、それがなければミツネは…

「うむ。助かつておつた。完治し、お主と生涯を共に過ごす運命じやつた。」  
てことは、彼女の両親も元氣で、幸せだつたつてこと？

「その通りじや」

はあ？

「本当に申し訳ない。」

彼女の両親はこれからどうなる？

こんな事言いたくないが、二人共おかしくなつてしまつたんだ。

「わからん。お主らとの話を済ませる事で、お主らの世界とワシの世界は収束を初めて、やがて未来が見える。今は不安定なのじや。じやから何とも言えん。」

くそつ……なんだよそれ：

はあ、それはあんたが悪いのかよ？

「ワシは管理者じゃからの。ワシに原因があると言える。謝つても済まないことなのはわかつておる。」

ただ、実際悪いのはその極大な力とやらを暴走させてしまつた奴じやないのか？

「それはワシの世界の中での話じや。他の世界へ干渉となるとそうはいかん。」

わかつた。

もう一つ聞きたい事がある。

「聞かせていただきたいの。」

ミツネはどうしてる？一緒に死んだんだ。

「うむ。ミツネ殿とは先ほど話を終えたのじや。先に逝つたのは彼女じやから。その次にお主じや。」

「そうか。わかつた。」

「どこかにいるんだな、安心したよ。」

「で、今どこにいる？」

「転生の準備中じや」

「は？ 転生？」

「ワシの世界へ転生するのじや。生と死は真逆じやから。そちらの世界で干渉によつて二つ命が減ると、こちらの世界で二つ命が増えるのじや。そうやつて全ての世界は出来とる。」

「わけわからん。なんで元居た世界に戻れないのか。減つたんだから戻したらいいじゃないですか。」

「そちらの世界の命の数を、こちらの世界が奪つてしまつた。その数で世界は決定してしまつた。そう言えばわかりやすいかの。」

奪つたつて…隨分乱暴ですね。

「命への干渉じやからぬ。乱暴なんてもんじやないのじや。禁忌じやよ。」

禁忌ですか…

「お主は物わかりが良いのう」

だつて意味わからぬですもん。冷静に聞かないともつと酷くなる。

「そうかの。」

で、本題は？転生がうんたらとか。

「そうじやの、では本題はじや。」

＼＼＼＼＼＼＼＼

話を聞いてから質疑応答をした結果、爺さんの話を要約するところだ。  
まず、転生をする。

そして、ある程度転生の内容を指定する事が出来る。三つ位の条件なら受ける事が出来るそうだ。

そう理解した上で、爺さんに質問をする。

転生体は人？それとも人外？

「それはお主の思い次第じや」

条件に極大な力を指定することは出来る?

「出来ぬ。極大な力とは、自然が生み出す力の集合じや。それこそ、運命じや」  
どんな世界?

「少しばかり見せられるぞ、ほれ」

～～～～～～

目の前が突然森になつた。

そして、すぐにわかつた。

あそこにはジャギイだ。間違いなく。隣にジャギイノスもいる。  
ほんの数秒、世界を見て、すぐに元の景色へ戻つた。

「モンハンじやねえか!!」

~~~~~?

色々と驚きがあった。まさかモンハンとは…

ただ、モンハンの世界なら条件の指定もしやすい。
戸惑いもあるが、冷静に考える。

質問を続ける。

ミツネはこの世界を見た?

「見せたぞ。お主のと同じように”もんはん!”と叫んでおつた。なんなのじや?それは
?」

なんでもないよ。で、次の質問。

ミツネは人になつた?人外になつた?

「まだ転生中じや。というよりも、お主の儀式の終了と共にミツネ殿の儀式も終了する
んでの。」

はあ、どうしようかな…

最後の質問。

ミツネの出した条件は?

「それはの、

一つ、強い体

二つ、自由な生活

三つ、アルと共に
じやよ。」

⋮
ミツネらしいと言えばミツネらしい。あいつ、転生に夢見て良く考えずに指定したな

それに強い体つて⋮モンスターにでもなる気かよ⋮

＼＼＼＼＼＼＼＼

しばらく考えて、条件を決めた。

一つ、力を暴走させた奴をぶんぬぐる。

二つ、ミツネを守る力。

三つ、ミツネと共に。

この三つだ。

色々考えたが、結果こうなつた。

一つ目は単純に思念だ。こうなつた元凶に喝を入れなければ。

二つ目と三つ目は、絶対に入れると決めていた。

そして、多分ミツネはモンスターに転生する。勘だけど。ここだけは賭けるしかない。

ちなみに、よくある成長速度増大とか、リミット解除も出来るのか聞いたが、自然の摂理とかなんとかで出来ないそうだ。

転生が出来てなぜそれが出来ないのか。疑問だ。

～～～～～

「では、始めるぞい。」

どうやら本当に転生するらしい。

地面が白く光り始め、わけのわからないまま儀式が始まった。丸い光りに包まれて、光の外にいる爺さんはこちらへ手を向けているのがぼやけて見える。

ふと爺さんが言つた。

「少しばかり条件を増やせそうじゃ。空きがある。何かないかの？ 小さなことしか叶えられぬが」

今それを聞きますか？

うーん、どうしよう…

ミツネに会えればとりあえずは良いんだよね。

「ミツネ殿と同じ場所に転生するから安心せい。 そうじや、お主は病院食がどうのこうの言つておつたな。 その辺から何か出せぬか?」

ほほう…モンハン世界とは言え、何食わされるかわかつたもんじやないしな。
おーけい、わかつた。

じやあ条件を追加します。

四つ、美味しいものを見ただけで判断出来るように。

「うむ。 丁度良い条件じや」

「では、さらばじや」

シユツと音を立て、視界が全ての白く染まつた。

こうして、俺の転生ライフは始まつた。

一幕 第二話

日差し…

眩しいなあ…

あ!!!!

転生したのか！わあお！

冷静なフリをしながら、周りの景色を眺める。ここは…森丘かな？池があるし、確かに森丘のマップの左上。10番だったかな？周りの植物や岩場も見たことのある景色だし、そう推測する。

景色を見渡しながら、気がついた。自分の体の様子がおかしい。どうやらモンスターに転生した様だ。尻尾の感覚があるし、体を動かそうとすると違和感だらけだ。羽の感覚は無い。大きさはケルビとキリンの中間位。俺の足はそれよりも短いけど。体毛が生えていて、毛は灰色。何はともあれ、モンスターに転生出来て一安心する。
そして…ミツネはどうだ？

「きやああああああ！」

「流石に無理！転生してすぐにモンスターとの戦闘は無理だよお！！」

絶叫が聞こえた。ミツネの声がした！
さて、ミツネはどんなモンスターだろうか？
ん？声？人の声？

そこには、草の陰に向かつて走つて逃げる少女がいた。
飛び込んだ草の中からこちらを覗いている。

「グオルルルルア!!」

(人間じやねえか!!)

盛大にツッコんでみたが、やはりモンスター。自分でも驚くほどの咆哮になつた。

「あわわわわわわわ！ごめんなさい人間です！助けてよアルに会いたいよう助けてよアル

ルう」

混乱してらつしやるな、ミツネ殿。

そして、俺のツッコミに対してある程度の返事をしている。天然かな？

「ガルルル

(ミツネ、俺だよ。俺がアルだよ)

「へ？」

「ガルル、ガルア」

(君の目の前のモンスターだよ)

「嘘だ！ そう言つて食べるんだ！」

うーん、どうしよう？なんか証拠でもないかなあ…あ、そうだ！あの合言葉がある！

「ガルルツ！」

(ナースコール！)

「何をいきなり……はつ、その合言葉はまさか、本当にアル？」

「ウガツ」

(おう！)

「アルだあ！ アルウウ!!」

ミツネはこちらに駆け寄つて、俺の首に抱きついた。

やつとだ。やつと会えた。

その安堵からお互いにへたり込む。ミツネに会えたんだ。それも、とびきり元気な彼女に。

少し休んで、お互いの見た目の話が始まつた。俺はガルルと鳴き声で、ミツネは普通に話をする。

「なんでアルはモンスターなの？」

「いや、ミツネがモンスターになりそうな気がして。勘だけど。」

「あははは！勘かあ！でもしようがないよねえ、お互いわからないんだもん」

「以外だつたよ、それならどうしてミツネは人間に？」

「アルの事だから、いろいろ生きていくのに便利な人間を選ぶかと思つて。文明はあるわけだし、交流もあるだろうから。それなら、私も人間になろうかと思ってね」

「ああ～～そうきたかあ～～：お互いにお互いの事考えた結果、逆になつたと。」

「そうみたいだね～まあ、実際こつちの方が楽しそうだよ！アルはモンスターでもいつも通りのアルだもん」

「そういうえば、ミツネは人間だけどずいぶん小さくなつたな。」

ミツネは俺の体を触つて、もふもふだねえ、犬みたーい。と言つている。

アレエ？竜っぽい見た目が良かつたのになあ。

そんなことより、そうなのだ。ミツネが幼くなつてゐる。大体小学生の、中学年位か。ずいぶんあどけない。爺さんから貰つたのか、地味な色で法衣に似た服を着てゐる。

「ああ！本当だ！ちつこい！おっぱい無い！」

「今気付いたんかーい！それとおっぱい言うな。」

「ごめんごめん。びっくりしちやつて。でも本当にちびっこになつちやつた。これから

大丈夫かなあ?」

岩の上に乗り、くるくると回りながら自分の姿を眺めるミツネ。ちびっこでも可愛いもんは可愛いなあ‥

「うわあ!」

その時、ミツネが岩から滑った。

焦つた。側から見ればちびっこが転んでいるのだ。

「痛てて、肘思いつきり打つちやつたよお〜〜」

「大丈夫?」

急いで駆け寄り、患部を見ると血が流れていた。

「うん。擦りむいただけかな。一応そこの水で冷やすよ」

そう言つて池に向かうミツネだが、すぐに歩みを止め、こちらを見て

「治つた」

そう言つた。

「治つた? あんまり強がつちやダメだよ?」

「違うの。本当に治つたの。」

ミツネは肘を俺に見せる。するとそこにあつた筈の傷が消え、少し血が付いていた。ミツネは池の水で肘を洗い、もう一度俺に肘を向けた。

「本当に、傷一つ無い…」

「すごい！治っちゃった！」

二人（一人と一匹）で肘を触つたりして、完治している事を何度も確認する。
「これがモンハンの世界の普通なのかな？」

ミツネが言つた。

転生直後は騒いでいたミツネだが、いろいろと順応が早い。そんな一言だつた。
「転生条件もあるかもしれないけどね」

「あ、そうだつた」

「まあ、ゲームでは明らかに貫通してた攻撃を受けてもハンターは生きてるんだから、モ

ンハン世界では普通なのかもな」

「とりあえずこの世界の私は強いんだね。」

脳筋な一言だなあ。

「過信しちゃいけないよ、ミツネ」

「うん。そうだね！あ、アルはどんな条件にしたの？」

「ミツネの条件に合わせたのと、一個思念がある」

「ええ！ずるい！白ジイから私の条件聞いたの？」

「うん。教えてくれたよ。ミツネは先に儀式を始めてるからって。てか、白ジイってあ

の白髪白髭の爺さん？」

「そ、うだつたんだ、でもアルが後で良かつた。私が後だつたら、きっと悩んで決められなかつたもん。」

白ジイかわいいよねえと言いながら、池の水をパシャパシャとはたく。

「アルと共に。つて条件は嬉しかつたよ」

「……や、」

「やつぱりずるい！先に聞くなんでするだ！」

「ごめんて！俺の条件も教えるから！」

「はよ！はよ！」

急かすなあ、もう。

～～～～～～

とりあえず俺の条件は教えた。ミツネを守るとミツネと共にの条件を話した時は顔を赤らめていた。

そして、例の暴走野郎をぶんぬぐつて条件には、小さく「そつか」と言つた。

因みに、俺の顔はモンスターなので恥ずかしさで赤くなつたりはしない。モンスターって便利。

そして、あの爺い”白ジイ”から聞いた、世界の干渉とか、俺たちの運命とか、彼女の両親の事も話した。

ミツネも白ジイから聞いていた様で、それ以上その話は進まなかつた。
↓↓↓↓↓↓↓

「あと、最後に一つ条件を足させてもらつた。」

「それ私も！小さいものならつて」

「ミツネもか。なんて言つたんだ？」

「教えなさい！ヒントあげる！」

「クイズかよお、で、ヒントとはなんぞ？」

「病院食！これがヒント！」

「白ジイめ、同じ事言つたな」

「異世界で何食べるかわからないからね」

「美味しいものたくさん食べる！とか？」

「いくら私でももうちよつと考へるよお」

「なにい…うーん、わからん、お手上げ」

「じゃあ先にアルが教えて！」

「俺は、美味しいものを見て判断できるようについて条件」

「あははっ、見て判断つてところがアルらしいね！なんかずるいなあ」

「いいだろお、美食っぽくて。で、ミツネは？」

「あのね、なんでも美味しく食べられるように！って条件にした！」

「なんだそりや、まるで悪食じやんか、あはは」

「いいの、色んなもの食べるんだから！」

そんな話をしているうちに、日は暮れて、俺たちは物陰へ隠れ、そのまま眠りについた。俺は地面に直接屈み込んで寝た。ミツネは俺の腹を枕にして寝た。

初めてのモンスター化での睡眠はなかなか寝付けず、少し夜更かしをした。電気もなく、光の消えた森丘から見た星空は、今までで一番美しかった。

決して、ミツネがそばにいて眠れなかつた訳では無い。断じて違う!! 断じて!!

一幕 第三話

太陽が少し見え、朝靄の中目が覚めた。良く眠れたな。体を伸ばそうとモゾモゾしていたら、ミツネが起きた。

「おはよう、アル」

「おはよう、ミツネ」

「一つ屋根の下で寝たのだ。（屋根は無いが。）初々しい挨拶に、少し照れる。
「どうしようか。実際これからサバイバルだぞ」

「ね、でもさっぱりわからないや」

「とりあえず飯でも探そう。」

「いいね！すつごいお腹減った！」

「じゃあ探索と食料集めに行くか」

「おーーーーー！」

テコニテコと歩き出したミツネの後ろを付いて行く。

（（（（（（（

ヤバい。

森丘のマップを覚えているから大丈夫かな。なんで考えて居たのがバカだつた。ゲームじや隣のステージへ向かえばロード画面になつて移動出来たけど、ここは現実。実際はずつと広いし、道がわからないと行きたい場所へ行けない。つまり、全く知らない場所を通らなければならぬ。何が言いたいかつて？迷つたんだよ。

＼＼＼＼＼＼＼＼

とりあえずさつぱりわからないので、マップの事は忘れて食べ物を探す。

「あ、これ食べれるんじゃない？」

小さな実をいつくか拾つてミツネが言つた。

良く見ていると、”美味しくない。”と俺の本能が知らせる。これが4つ目の条件で出来た本能なのかな？

「いただきまーす」

なんの躊躇も無くミツネが口へ入れた。

「ちよ、待て待て！何かわからないんだぞ！」

「大丈夫だよ！多分！」

ポリポリと実を食べるミツネ。

不安になりながら見ていると、

「美味しい！柿の種の味だ！」

うつそだろ、まじか。

「本当に美味しいの？俺の本能は美味しくないって言つてるぞ」

「美味しいよ！アルも食べる？」

「うう、怖いなあ」

ミツネが平気でポリポリと食べているので、勇気を出して食べてみる。

ポリつ

「か、か、辛い！！」

ヤバい！これはヤバい！美味しいくない！必死の思いで涙を流しながら、飲み込む。

「えつえつ、アル、大丈夫？」

「はあ、はあ、大丈夫：だけどその実はもう絶対食べない」

「うう、ごめんね、食べさせて。なんでだろ、美味しいのになあ」

” 。その違いが今顕著に現れた。

ミツネはポリポリと実を食べるが、俺には美味しいくない。

まだ舌がピリピリする。

「ミツネの悪食は便利だな」

「いいでしょ。我ながら良い条件だと思うよ」

実際、サバイバル生活の中でなんでも食べられると言うのはめちゃくちゃ有利だ。
俺も何か食べられないかと、辺りの草木を良く見る。すると、
まあまあ食える

そう、本能が示した草があつた。

「お、これ食べられそう」

「見つけたんだ！どんなの？」

「この雑草みたいなやつ」

ただの雑草にしか見えない。でも背に腹は変えられない。

ムシャ

「ちよつと苦いな…でも、まあまあ食える。」

「私も食べるー！」

そう言つて雑草を口に入れる。

「なんか苦くない？その草」

「お、美味しい！ほろ苦いけど、シャキシャキしててみずみずしい！三つ葉みたいな味だ！」

「嘘だろ、美味しいか？」

そんなこんなして、まあまあ食える草をひたすら食べた。ちよつと食べ足りないけど。

ミツネはそこらじゅうの実やら草やら食べて美味しい美味しい言っていた。いいなあ。

／＼＼＼＼＼＼＼＼

食休みを少しだした後、歩いていると、何やらモンスターが寝ていた。
背中が緑で、豚のような見た目。

「モスだ」
「モスだね」

ミツネと感想が一致した。そして、ミツネが寝ているモスへ近づく。

「危ないぞ、一応モンスターだし」

「大丈夫。何かあつたらすぐに逃げるから。それに、何かあつたらアルは私を守ってくれ

れるんでしょ？」

えへへ、とミツネは笑つた。

しようがないなあ、と俺もモスの近へ寄る。

グゥグゥと寝ているモスを見ていると、本能がこう示した。

”美味しい”

キタコレ！でもどうしよう、食べるには命のやり取りだもんなあ。いや、弱肉強食なのかな。と言つても、俺はモスより強いのか？

ミツネは落ちていた枝を拾つて、モスをつつこうとした。

「まじですか、ミツネさん。一応逃げる準備しどこうよ」

わかつた。と言つて、ミツネは半身でモスをつつく。

その瞬間、

ズバンツ!!!

と音を立て、枝から赤黒い光が散つた。

「えつ▣何事？何が起きたの？」

「わからん、枝が光つた。」

そして、モスは目を覚まし、俺たちの方へ突進してきた。

「逃げろー！」

二人して走り出したのだが、モスは俺たちのすぐ近くで倒れこみ、動かなくなつた。
これが、俺たちの最初の狩りだつた。

〜〜〜〜〜

動かなくなつたモスをつづいているミツネに、聞いてみる。

「死んだのかな？」

「多分、死んでる。つついただけなんだけどな」

ミツネは怯えながら言つた。そのまま続けて、

「でも、違う…死んだんじやない」

「どういうことだ？」

ミツネが悲しそうに言つた。

「殺したんだ…。今。私は、モスを殺したんだ。だから、私に今必要なのは、この子を美味しく全部食べてあげる事。世界の仕組みだよ。」

大事な事だつた。弱肉強食とは、強い奴が弱い奴に勝つ事じやない。強い奴が弱い奴を食べて、生きる糧にする事だ。そして、今ミツネはモスに勝つた。お互いに不本意ではあつたが、このモスは生きる糧となる。

「そうだな。食べよう。しつかりと。そして、生きて行こう。」

一人と一匹は、改めて、この世界の住人となつた。

＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼

さすがに包丁も無いし、捌く道具も無い。なので、俺が肉を噛み千切る事になつた。正直グロテスクだつたが、さつきまで生きていた命だ。しつかりと認識して大事に肉を噛む。

「美味しい!!!」

やつと、美味しいものにありつけた！

前の世界の肉なんて比べものにならない。

生肉なんぞ食べた事は無いが、これは美味しい。

「本当に？私も食べる！」

肉を適當な大きさに噛み千切り、ミツネへ渡す。血の滴る肉を見て、ミツネは少し動揺したが、俺と同じよう大事に食べた。

「美味しいーーーい!!!」

ミツネが叫んだ。ランランと生肉を食べている少女は相当見応えがあつた。

ヽヽヽヽヽヽヽ

腹の膨れた一人と一匹。

その間には、血の付いた骨と、苔の生えた皮。

生きるための殺生をした一人と一匹は、「ゞちそうさま」と言つた。

一幕 第四話

モスを食べてその後。

残つた昔の付いた皮を使つて、トゲ状の実で穴を開け、ツタを通して袋を作つた。モンスターの俺は手が使えないのに、ほとんどミツネが作ったのだが。

今は俺の体にくくり付けてある。このツタは結構頑丈で便利だ。

そして今、ずっと探索である。

一つわかつた事がある。モンスターの俺は魚を捕るのが上手い。

ミツネは武器を手に入れた。昨日、初めて狩つたモンスター、モスの骨を二本折り、双剣に見立てただけの代物だが。

モスを昼食と考えて、日の沈み始めた頃。

夕食を探していたらアプトノスがいた。食べようと襲い掛かつたが、骨双剣では叩く事しか出来ず、俺も噛み付いたが振り払われてしまつた。

アプトノスには”美味しい”と俺の本能が示したので何とかして食べたかつたのだが。

「俺達、弱いな」

「うん。弱いね」

そんな話をした。

仕方ないので、草や木の実を探り、魚を捕まえて夕食を済ませ、適当な穴ぐらを探して寝た。

「どれも”まあまあ見える”や、”美味しくない”だつたので、満腹にはならなかつたが。

対して、ミツネはなんでも食べる。それもとびきり美味しそうに。いいなあ。
ここまでが、昨日のあの後と出来事。

～～～～～～

「今日はどこへ行くー？」

「行つたことの無い所を目指そう」

「りよーかいです隊長！」

こんなでいいのか？と思うほどのほほん具合だが、一応周りを気にしながら生活している。

そして、ミツネの悪食だが、予想外のことがわかつた。

毒キノコでも食べられるのだ。

探索をしている時に、

「アルはこのキノコ食べれそう？」

とミツネが聞いてきた。よく見ると、”食べたら毒”と美食センサーが示した。

美食センサーとは、例の本能のことだ。ミツネがそう呼ぶので、そう名付けた。

「ミツネ、このキノコ食べたの？」

「うん。ジューシーで美味しいよ！」

「毒あるっぽいぞ？」

「嘘！ヤバいじやん！まさかこれ、毒テングダケ団

「おいおい：なんか変な所無いか？」

「うーん…無い！」

悪食とはいえ毒まで食うとは：

そのあとしばらく様子を見たが、特に変化は無かつた。

ミツネと話したのだが、ミツネが白ジイへ出した4つ目の条件は”なんでも美味しく食べる”こと。それはもしかして、毒でもなんでも美味しく栄養にできるつてことなんじや無いかつて事になつた。

悪食つてヤバくね？

ヽヽヽヽヽヽヽ

ケルビを見つけた。川のほとりを歩いていたら見つけた。しかも三頭いた。
ただ、今は腹が膨れている。川の魚を片つ端から食べたのだ。しかし、ケルビに対し
て俺の美食センサーは”凄く美味しい”と示した。

「ケルビって美味しいの？ 美食センサーはどう？」

「凄く美味しいってさ。今度の夕食はケルビにしよう」

「凄く美味しい図やったね！ しつかりお腹空かせて準備しなきや！」

無駄な殺生はしない。俺とミツネはそう決めた。自分の強さを測るために戦うこと
も必要だが、怪我をしてしまつては意味が無いし、軽い気持ちで殺生をしてはいけない。
にしても、見覚えのある景色だな…：

そう思つていると、ミツネが口に出した。

「こゝ、見覚えあるよ」

「俺も思つた。多分森丘の1番だ」

間違いない。向こうに8番へ続く岩場がある。あつちは2番へ続く道。て事は…

「ベースキャンプが近くにある！」

同時に言つた。そして、ベースキャンプの方向へ走り出したミツネに着いて行く。

「待つてミツネ！ベースキャンプだ、もしかしたら人がいるかもしれない」
ピタツと走るの止め、そろりそろりと歩くミツネを見て、少し笑ってしまった。



何と無くだが、人には見つかりたくない。自由に生きることがミツネの条件だし、第一、人間であるミツネとモンスターの俺が一緒に居る事を他の人がどう見るかわからぬい。



幸い、道は一本道だった。

見覚えのあるテント、焚き火のための組み木、ここは間違ひ無く森丘のベースキャンプだ。

「すごーい！本物だ！」

「あんまりいいじると何があるかわからんぞ」とは言つたものの、これはワクワクする。

今まででは自然の中にいたが、この世界へ来て初めての人工物だ。いろいろ気になる。

支給品ボックスの中を見るミツネだが、「何にも無いや」と言つた。
俺はテントの中を見渡す。ベッドがある。これは暖炉かな?そして、小さなチエス
ト。

そしたらミツネが近くへ來た

「何かある?」

「うーん、このチエストが気になる。」

「こんなのがあつたんだ。知らなかつた」

そう言つてミツネはチエストの中を見た。そして、何やら書かれた紙の束を取り出し
た。

「何それ?なんか書いてあるぞ」

「うーん、さすがに日本語じや無いね、読めな……あれ?」

「いろんな植物の絵が書いてあるな、ん?どうしたんだ、ミツネ」

「私、これ読める。」

「ええ?なんですよ、俺は読めないぞ」

「どうしてだろ?ただ、なんとなく内容がわかる」

「白ジイのおまけか?」

「そうかも。とりあえず読んでみるね。」

「わかつた。頼む。」

ミツネは紙の束をペラペラとめくりながら、読み始めた。俺は何も出来ないので見張り。

「大体わかつた。これ、森丘の植物についての図鑑だ。」

ミツネそう言つたので、一緒に見る。

確かに、言われてみれば見覚えのある木の実や植物、キノコの絵がある。ミツネは今得た情報を元にいろいろと教えてくれた。

「多分、アルがよく食べてる草はこれ。薬草と、げどく草。それと、アオキノコもかな。まだ私達は食べて無いけど、やつぱり怪力の種や忍耐の種もどこかにあるみたい。あと、アルの言つた通り毒キノコは毒テングダケだつたよ。絵がそつくり。」

「すごいな、ミツネ。ありがとう」

「へつへーん！感謝しなきーい！私は賢者ミツネであるぞ！」

「ははーっ！」

なんてふざけていたら、ミツネが話を戻した。

「でね、この実の事も書いてあつたの。最初に一度だけ食べた、柿の種の味がするあの実。また食べたいなあ」

「ああ、あの死ぬほど辛いやつか。で、あれは何だつたんだ？」

「龍殺しの実。だつてさ」

「なるほどな、龍が嫌う実、龍殺しの実か。なんとなくモンスターにはキツそuddi、俺はもう食べないが。」

龍殺しの実のページをじっくりと見る。
何書いてあるのかさつぱりだけど。

「やつぱり、この世界には古龍とかいるのかな?」

「いるだろうな、モンハンの世界だし。」

「強くならなきやね。生きるために」

「そうだな、頑張ろう。」

＼＼＼＼＼＼＼＼

龍。古龍。竜とは違う、自然操るつて設定の強い奴ら。やつぱりこの世界にもいる
んだろう。

でも、アプトノスも倒せない俺たちじやすにやられてしまう。強くならねば。

＼＼＼＼＼＼＼＼

いろいろ見ていたら、日が暮れ始めた。
ミツネに声を掛けようとしたその時。

ガチャリガチャリ

硬さのある音がした。歩くときに出でしまう、防具の音。

すぐにわかつた。ハンターが近くにいる！

ミツネも気が付いたようである。急いでテントの裏へ回り、一緒に息を潜める。

テントの隙間から微かに姿が見えた。二人いる。一人の顔は覆われていて見えない。
もう一人は若い青年に見えた。

二人とも納品ボックスへ近づき、何かしまつてている。会話をしているようだが、俺には理解出来ない。外国语を聞いている感覺だ。

そして、納品を済ませたのか、二人のハンターはテントの中へ入り、睡眠と取り始め
た。



始めて見た、ハンター。モンスターを捕まえ、殺し、讃えられる。俺自身がモンスターとなつた今、そう見える。

俺の焦りを感じ取つたのか、ミツネもじつとして、小さく呼吸をしている。ミツネが小な声で言つた。

「寝てゐる隙に、逃げよう」

それしかないと思つた。俺が知つているのは、納品クエストなら、納品してクエストクリア。20秒したらいつもの村や集会所。そこまでしか知らない。

でも、この二人のハンターには、クエストクリア後の20秒など存在しない。自分で帰るのか、何か迎えが来るのか。

であるなら、この二人がいつまでここにいるのかがわからない。逃げるなら今。

そして、ミツネへ俺の背中に乗るように促し、毛をしつかりと捕まらせてから走り出した。

／＼＼＼＼＼＼＼＼

観測船からギルドへ

新人ハンター、マランツとクロツクの経過報告について。

クエスト内容はランボス15頭の討伐。

ランボスを8頭討伐後に、ベースキャンプにて清算アイテムを納品。

仮眠を取り、再度出発する模様。

追記

森丘にて未知のモンスターに乗る少女のようなものを視認。その後すぐに森へ入り、消息は不明。

この事への指示を求める。

以上

{ } { } { } { } { }

一幕 第五話

めちゃくちゃ走った。

ミツネが力強く俺の体毛を掴んでいる感覚がある。

とにかく、今はハンターから離れたい。必死に駆け抜けた。

＼＼＼＼＼＼＼＼

目の前の地形を瞬時に理解して、舞うように走った。

この姿になつてから初めて全力で走つたが、自分でも驚きの身体能力だつた気がする。

そして、今は森の中にいる。マップには無かつた場所だ。少し開けた場所へ着いたので、止まつてミツネを降ろす。

「すぐかつたね！アル！バビューン！つて走つて、スタッ！つて飛んで！楽しかつた！」

さつきまでの緊張を押しのける様に、ミツネがはしゃぐ。

「びっくりしたよ。なんか野生の勘みたいなのがあるのかな、俺。つて言うかこの体

は。」

「ハンターには気づかれたかなあ？」

「どうだろう？一応森の中だし、気づかれていても見つけられないと思う。注意して行動しなきゃいけないのは変わらないけど」

「大丈夫だと良いけど、あの二人、また狩りに戻るつて話してたし……」

「そうか……また会ってしまうかも知れないな……気をつけな……ん？なんでミツネはハンター達の会話を理解してるんだ？もしかして言語が理解出来る？」

「うん。最初は外国語に聞こえたんだけど、なぜか理解出来てたの。文字は読めたし、そういうものなのかなって。」

「転生特典？なのか……で、二人はなんて話をしていたんだ？」

「えっと……

「討伐対象は残り何頭だ？」

「今、八頭まで討伐しています。」

「そうか。後七頭で終わりだな」

「ええ、すばしつこくて大変です。クロツクさんはよくバテませんね。」

「マランツ、お前はいちいち全力で走り過ぎなんだ。もつと緩急を付けて、相手を良く見る様にしろ。」

「わかりました。次は頑張ります。」

「おう。しかしアイテムポーチがいっぱいだ。清算アイテムを納品してアイテムの整理、少し仮眠をとつたらまた向かうぞ。お前も納品を済ませろ。」

「了解です。クロツクさん。」

「つて感じかな」

「なるほどなあ。清算アイテムか：納品クエストかと思つてたよ。」

「討伐って言つてたけど、ターゲットは何なんだろう？」

「森丘だからな：ランポスとかブルファンゴとか：その辺かなあ？」

「もう会いたくないね、ハンターには…」

「本当だよ：もうこりごりだ…」

（～～～～～～）

いつもより念入りに寝床を探した。枝や葉っぱを集め自分達を隠し、眠りに着くが、眠れない。

一度、考えを整理しようと、物思いにふける。

疑問はたくさんあるが、大きなものはこの辺。

・ミツネはなぜ言語を理解出来る?

・そもそも転生とはなんだ?

・ハンターはどのくらいの頻度で狩猟へ来る?

・俺は何のモンスターだ?

細かいことは色々あるが、気になるのはこの四つ。

その事を深く考える。

・ミツネはなぜ言語を理解出来るのか。

教わつてもいないし、この世界で育つてもいない。白ジイのおまけと思つてしまえば解決するが、そんな条件は出していない。

・そもそも転生とはなんなのか。

俺のイメージではあるが、異世界転生ってやつは、新しい子供として産まれ、前の記憶を持つたまま成長していく。

そんなイメージだし、他で言う異世界転移なんかは、自分の体を保ったまま異世界に行くつてやつ。

ミツネはどちらでも無く、少女の姿で転生した。俺もある程度動ける体に転生したし、産まれたばかりの体では無いと思う。

転生でも転移でも無く、創造された命なのかもしない。

憑依と言う線も考えたが、命の数が決まつていると白ジイは言つた。この線は薄いと思う。ただ、ミツネが言語を理解している点から、憑依した相手の知識を使つているとも考えられる。だからゼロでは無い：

- ・ハンターが来る頻度は？

単純に危機管理として問題だと思う。

ゲームではロード画面で一瞬だつたけど、現実ではマップの移動に数時間かかるし、森丘から村やギルドまでどのくらい離れているのかもわからない。

ハンター自体どのくらいの人数がいて、どのくらいの頻度でクエストへ出ているのかもわからない。何か知る方法があれば良いのか。

- ・俺は何のモンスター？

転生してから次の日辺りに、ミツネがチラツと言つた事から考え始めたことだ。

「そういえばアルは何のモンスターなの？ゲームには出てこなかつたよね」

言われてみればそうだつた。

ミツネ曰く、見た目は犬。犬よりは体は大きいけど。1番近いところで言えばジンオウガだけど、体毛の色も違うし、角も無い。尻尾だつてジンオウガよりはずつと細い。

成長したら変わるかも。でも、これが成体なのかも。わからん。

正直、タマミツネに転生したかつたのは内緒。

～～～～～～～

次の日。ミツネが先に起きていた。

「おはよう、アル」

「早いな、どうしたんだ？」

「なんか夜明け前に目が覚めちゃつて。だからそこの川で水浴びして、体を洗つてたの。アルが寝ているうちにね」

クツツツソ！昨日あんな考え方で夜更かししなければ…

あああああ、冷静になれ、冷静に：相手はミツネとは言え、幼女だぞ：

「そうか、さっぱりしたか？」

何とか引っ張り出した一言。

「むつ、アルめ、恋人がすぐ近くですっぽんぽんになつてたんだぞ、もうちよつとあわてたらどーだい？」

ぐつ、かわいい：しかし負けんぞ！

「だつておれいつもすっぽんぽんだもん。」

我ながらいい切り返しだな、こりや

「えつ…あつ…そうだつた…そつか、アルはいつもすっぽんぽんなんだ…すっぽんぽん
」

顔真っ赤だぞ、ミツネ…
可哀想なので、話を変える。

「さあ、探検に行こうか。でも、昨日のハンターがまだいるかもしれない。なるべく静か
に、こつそりな。」

「わかりました、すっぽんぽん隊長。」

「あははつ、バカ、笑わすな、本当にハンターがいたらどーするんだ」「
ごめんごめん、じやあ行こうか、アル」

／＼＼＼＼＼＼＼＼

ギルドから観測船へ

了解。そのまま観測を続行せよ。

少女と未知のモンスターに着いてだが、現在、ギルドへそう言つた内容の行方不明者

の連絡は無い。

森丘周辺の集落の子供である可能性が高いと見られる。

以後、発見した際には、モンスターについては、外見の特徴を明記。可能であれば捕獲。少女がいた場合は保護せよ。

一幕 第六話

ミツネが背中に乗りたいと言うので、乗せながら散策している。

しかし、昨日の様に走ろうと思つたのだが、うまく走る事が出来ずに、今はゆっくりと歩いている。

なんでだろうか、あの韋駄天の如く走る感覚は残つているのだが。昨日の速度まで上げると足がもたつきそうになる。

まあ、ミツネは俺の背中でご機嫌なので良い。

実やキノコなどを鞄に入れながら散策をする。

そうそう、散策していたら龍殺しの実を見つけた。

ミツネは拾つて食べていただが、あんなものよく食べられるな、と思う。

～～～～～

細い岩のすき間を抜けると、周りを高い岩に囲まれた小さな広場へ出た。

ほえー、なんか凄い景色だな、井戸の中から空を見ている様だ。

「アル、ここ、森丘の6番だよ！」

あつ！、俺は岩登りがめんどくさくてあんまり使わなかつたけど、確かにそうだ。

番だ！

「登つてみようよ！上まで！」

「でも、この上つて5番だろ？モンスターの巣じやん。リオレウスとかいたらどうしよ
うもないぞ？」

「危なかつたら逃げる！こつそりと行こう！」

「言い切るなあ、ミツネは…」

「わかつたよ。じやあ登ろうか、この岩場。」

（～～～～～～）

クツソ疲れた。

画面の中のハンターはよくこんな崖をするする登るよな、信じられん。
ミツネも相当疲れた様だ。

少し休憩をとつて、5番：巣穴への入り口へ近づく。

中から音はしない。が、少し臭い。

俺とミツネは少しずつ、音を立てないように入つて行く。

そして、視界が開けて、画面越しによく見た、森丘の5番が視界に広がる。

しかし。

／＼＼＼＼＼＼＼＼

死体があつた。3つ。

ランボスだと思う。

どれも血を流し、絶命していた。

首があらぬ方向を向いている。内臓が出ている。
悲惨な光景だつた。

「ううえつ……」

ミツネが嘔吐した。

ピシャツつと音をたてて、吐瀉物が落ちる。
ミツネに近寄り、前腕で背中をさする。
しかし、何も言えない。

「大丈夫……めんね」

「キツいな、これは…」

「うん…」

ふと、頭に昨日のハンターがよぎつた。

ミツネが訳してくれた、ハンター達の会話。

討伐対象はランポスだつのもしれない。

ミツネは壁の方へ行つてうずくまつてしまつたので、そつとしておく。

俺は死体へ近づく。

武器は何を使つたのか？

剥ぎ取りは？

知識があるわけでは無いが、傷口から何となく想像出来ると思つた。

↓↓↓↓↓↓↓

三頭、それぞれの調査を終えた。

内二頭は多分切断系の武器。腹や尻尾に切つた跡がある。が、武器の種類はわからな
い。

残り一頭は弓。単純に矢が刺さっている。胴体に二本、頭部に一本。
そして、弓で仕留められているランポスは皮が剥がれていた。他二頭は戦闘による傷
で皮が使い物にならないのだろうか、皮が剥がれているのはこの一頭だけだ。ただ、肉
や骨が大きく見えている。相当グロテスクだ。

一つわかつた。

この悲惨な光景は、ハンターが作つたものだ。

＼＼＼＼＼＼＼＼

ランポスの皮。

序盤の武器防具でちよくちよく要求される素材。

当然、それが欲しければそれを求めて討伐し、剥ぎ取りや報酬にてアイテムを得る。

言い換えてしまえば、

相手にダメージを与え、相手の命を奪つて、欲しいもの奪い取る。

ハンターからしたら当然の事だ。俺もモンハンプレイヤーだったし、同じ事をしてい

た。

手に入れた素材で、装備を強化して、さらなる敵に挑む。

しかし、ハンターが派遣されたということは、依頼主がいて、ハンターと依頼主お互の利害が一致して、受注して討伐をしているはずだ。その事から、このランポスが全くの無害な存在という訳ではないと言える。

残酷だがこの世界とは、そういう世界なのだ。

～～～～～

「アル、何をしているの？」

ミツネがこちらへ来た。気分は優れなさそうだが。

「このモンスターに何があつたのかと思って。観察していた。
ミツネに今の観察を踏まえた俺なりの考えを教えた。」

ハンターによる討伐であること。

このランポス達に害を受けた依頼主がいるであろうこと。

ミツネは黙つて聞いていた。

「私も、同じだつたのかな」と言い残して。

／＼＼＼＼＼＼＼＼

「ミツネ、そろそろ行こう。長居してしまつたけど、ここはモンスターの巣だ」
死体を見るミツネの背中に話しかける。

しかし、

「ねえ、アル、いいかな？」

「どうした？ここにいても危険だぞ」

「わかってる。でも、どうしても。」

「一体どうしたんだ？」

「この子達、私が食べる。」

優しさなのか、強さなのか。

無計画な提案だつたが、ミツネはそう言つた。

「……。食べるつたつて、ここには居られないし、持つて帰るのも一苦労だぞ。ミツネ
の気持ちもわかるけど。」

観察している時に、ちらちらと美食センサーは反応していた。“まあまあ食える”そして、”腐食している。食べられない”など。観察の邪魔だつたし、グロテスクなものを見過ぎて食欲が湧かなかつたので気にしていなかつたが。

「このままじゃかわいそう。せめて、私が食べて、糧にしてあげたい。」

「わかつた。でもここで食べるのも持つて帰るのもダメだ。俺が肉を取るから、ある程度取つたらここから離れるぞ」

ミツネは「ありがとう」と言つた。

”まあまあ食える”と反応を示した部位だけ、噛みちぎる。ミツネはその肉をモスの皮で作つた袋に入れる。

＼＼＼＼＼＼＼＼

肉を集めた後、森のなへ戻つて來た。

大体土地勘も掴めて來て、水辺などの位置も覚えた。

太陽は真上。大体正午あたり。いつもなら昼食を取る時間帯だ。腹は減つている。そして、食材もある。しかし、食欲は無い。

ミツネは鞄を開け、肉出した。血が滴つているので、水で洗う。

「いただきます」

最初は何も言わずに食べていたが、途中からミツネは泣いていた。美食センサーは“まあまあ見える”と示したが、味はわからなかつた。ただ、生き物を食べる実感があつた。

＼＼＼＼＼＼＼＼

ゆっくりと食事を進めていたら、嫌な予感がした。

嫌な事つてのは続くもんだなあ：

まあ、考えてみればそうだ。隠れているとは言え、森の中で獣臭い肉を食べてるんだから。

俺たちが悪い。

ギヤアギヤアと鳴き声が聞こえる。

その声の方向を見ると、やはりいた。捕食者が。

ゲームの中ではただの雑魚だつたけど、今は脅威に見える。弱者にとつては恐怖だ。ランボスの群れ。

逃げようにも、背中側は壁。

…やばくねえか？これ。

一幕 第七話

肉の匂いにつられたか、仲間を思つて来たのか。

定かでは無いが、明らかに戦闘態勢の3頭のランポスの群れに囮まれている。
逃げられない。

逃げられないのを悟ったのか、ミツネも骨双剣に手をかける。俺も威嚇の為に喉を鳴らす。

しかしどうしようか。アプトノスを仕留め損なつた輝かしい実績を持つ俺らにとつて、ランポスはまだまだ遠い相手だぞ：

睨み合いながら、考える。

攻めることができるのは、相手の首。アプトノスよりはずつと細いし、噛みつくことが出来ればチャンスはある。

「ミツネ、どうする？」

「とりあえず周りを走つて様子を見るよ。アルは何か考えがあるの？」

「首に噛みつければいけるかも。でも、確実ではない。」

「わかった。囮になるからアルはその隙を狙つて。」

「了解。気を付けてな。まずは向かつて右のランポスから行こう。」

「わかった。アルも気をつけてね」

そう言うと同時に、ミツネは飛び出した。

ミツネも自分の骨双剣が使い物にならない事を知っている。それもあつて囮になると言つたのだろう。

初の戦闘らしい戦闘だが、お互ひ慌てずに行動出来ている。きっと四六時中ゲームで鍛えた連携みたいなものが今生きているんだろう。

ミツネは群れの右側から周り込み、端つこのランポス（ランポスAと考える。）に石を投げつける。ランポスAはミツネの方を向き、大きな鳴き声をあげて走り始めた。

他のランポス2頭（こちらも、ランポスB・Cと考える）もそちらへ向おうとするが、全力で咆哮してこちらへ気を向けさせる。その2頭がこちらへ来たのを確認して、直線的に、ミツネに向かつて行くランポスA目掛けて駆ける。

不思議と足は進む。自分でも驚く程に。

…この感覚…いつかハンターから逃げた時に感じた、韋馱天の感覚だ：

不思議と体が前へ進む。景色が一瞬で後ろへ消えてゆく、あの時の感覚。ランポスAは完全にミツネを見ている。俺はその真後ろ。絶対的な好機だ、見逃せない。

ランポスAから2メートルほど離れた位置から、首目掛けて飛ぶ。
ガツ！

上手くいった。ガツチリと首に噛みつくことが出来た。

ミツネもそれを見て、俺に「任せる！」と言つてランポスB・Cの元へ行く。
暴れるランポスAを前足で抑え込み、頸に力を入れる。しかし、思ったよりも硬い。
一思いにここで息絶えてくれれば、辛くないのに。

命のやり取りをしている今、優しさで生かしてやろうなんて考えは、今の俺には無い。
前足を、支点にして力をグツと入れて、ランポスAの首を折る。
こちとら元々人間だ。テコの原理くらい知つている。

ランポスAは体をビクツビクツと震わせている。

やつた。しかし、終わりでは無い。ミツネはどうして?

「アルウ〜助けて〜！」

氣の抜けるような声のする方を見ると、ミツネとランポスB・Cが追いかけっこをして
いた。締まらないなあ。

急いでミツネの元へ駆ける。

ミツネに追いつき、叫ぶ。

「ミツネ！乗れ！」

「アルウ!!!」

バツと横つ飛びをしてミツネは俺に抱きついた。

ミツネさん、それは、「乗る」じゃなくて、「しがみつく」だよ。そのままランボスから離れるようにして、駆けた。

このまま逃げ切れば良いんだけど。

／＼＼＼＼＼＼＼＼

そうですよね～。

うまく行きませんよね～。

ランボスは追つて來た。

走りながら聞く。

「ミツネ、どうする？」

「うーん、やるしか無いかんじ？」

「だなあ。」

そうだよなあ。嫌だなあ。

「さつきと同じ作戦で行こう。アル」

「わかった。気をつけてな。」

「うん！」

立ち止まり、ランポスたちと対峙する。ミツネは俺から飛び降りて、先程と同じように周り込む形で走り出した。

ミツネを目で追うランポス達に、咆哮をあげせる。少しこちらに気が向いたのか、ランポスBはこちらへ来た。

すかさず、ミツネはランポスCへ石ころを投げつける。

ここまでには完璧。

そして、ランポスCはミツネの方へ。

ランポスBは俺の方へ走つて来た。

クソッ、今ランポスBの相手をすると、ミツネが危ない。

そう思い、怪我を覚悟でランポスBに突進をして、弾き飛ばす。多分ランポスBにダメージは無い。その突進したエネルギーをそのままに、ランポスCへ向かう。

ランポスCは、ミツネへ飛びかかるうと宙に浮いていた。
させるかよ、チクショウめ。

足にグッと力を込めて、ランポスCに突進をする。ミツネの目の前で、宙に浮いているランポスCへ肩でぶつかる。

ギリギリセーフ。

突進で倒れ込んだランポスCの首へ噛みつき、ランポスAにしたのと同じように首を折る。これでランポスCはお終い。

「アル！ 危ない！！！」

ミツネが叫んだ。

ザクツ

いつつつってえ！ 背中を噛まれた！

振り落とそうと暴れるが、なかなか落ちない。

乗り状態かよ、クソダルいな、実際乗られるのは。

「やめろおおお！ 離れろおおお！！」

ミツネが叫び、走り寄つてくる。俺に気を取られているランポスB目掛けて骨双剣を突き刺す。ただ、それじやあ切れ味悪すぎて弾かれ……

ズバンツ！！

いつか見た、赤黒い光。それと紫色の靄。

ランポスは俺から口を離し、怯んでいるが、ミツネはすかさずランポスの頭をもう一

度骨双剣で殴る。

今回は光も靄も出ない。

俺はランポスBの首に噛みつき、同じように首を折る。

＼＼＼＼＼＼＼＼

「終わつたの？かな？」

「そうだといいけど…」

初の戦闘を終え、お互に安堵する。が。

「アル！」

「ん？どうした？？」

「血！血が出てるよ！」

ミツネが慌てている。血？なんのこと…？

ズキン

「いってえ！」

そうだつた。ランポスに噛まれてたんだつた。

背中から血が滴る。傷は深くなさうだけど痛いものは痛い。

この世界にもアドレナリンつてあるのね。

「どうしよう…包帯も絆創膏も無いよー！」

ミツネさん…あるかい、そんなもん。

「薬草でも食べてみるか」

薬草を探して辺りを歩く。ズキズキと傷が痛むが、仕方ない。一方、ミツネはドタバタとそこらじゆうの草を引っこ抜いて薬草を探している。いい子だ。

＼＼＼＼＼＼＼＼

戦闘が終わる。クエストじゃないし、この後の事を考えなきやいけない。

一幕 第八話

ミツネが薬草を見つけてくれて、それを食べたら傷は塞がつた。薬草ってなんなの？ すぐね？

なんとなくわかつたのだが、薬草は傷を治すアイテムじやなくて、自分の治癒力を回復させるアイテムらしい。

人間もモンスターも、前の世界とは比べ物にならない程の治癒力を持つていて、小さい傷ならすぐに治る。

でも、さつきの噛まれた傷はその治癒力のお陰ではある程度まで治癒できても、完治まではいかないところまでダメージを負つた。

失った体力と、赤ゲージの関係性なのかな。

で、薬草とかを食べると完治する。失った治癒力を回復することができる。
便利な世界だな。

まだ考えなきやならないことはある。

ランポスとかの首を折つたのは咄嗟の判断だつたけど、切るとか叩くじやなく、頸椎を折るのは有効っぽい。

いわゆる、根性貫通の一撃。

なんとか勝つことが出来たけど、得るものもあった。

一撃必殺で戦えば、小型モンスターならなんとか戦えるかもしない。

忘れちやいけないのは、モンスターに根性貫通技が有効なら、俺たちにも有効であろうこと。

ゲームの中で見た様な、明らかに貫通してる一撃とかを食らってしまうと、それで死ぬんだと思う。1乙とかじやなく、死ぬ。

やつぱり鬼畜だよ、この世界。

あともう一つ。ミツネの攻撃時の赤黒いエフェクトの事。

「絶対龍属性のエフェクトだよね、あれ」

「なんだよな、それなんだよ。俺もそう見えた」

「モスの骨は龍属性だった団」

「んなわけあるかい！ 第一、前にモスをつついた時は枝だつたろうよ。あの時も龍属性のエフェクト出てたのに」

「あ、そつか！ そだつた！ ……じゃあなんでだろ？」

「ついでに言うけど、さつきの戦いでは紫色の靄も出てたぞ、少しだけど。」

「やつぱりアルも見えてた？見間違いかと思つてたんだけど」

「うん。で、紫色つてことは…」

「毒属性…」

「ミツネはクシャルダオラ絶対殺すマンなの？」

「違うよ！なんてこと言うの！」

「あはは、ごめんごめん」

「でもなんで属性なんか出たんだろう…」

「龍と毒…そんな要素あつたか、今まで」

「無いよねえ、そんなモンスターはまだ見てもいないのに。」

「ううん…龍と毒…モンスターが原因じやないなら…」

あつ!!!

「ミツネ、わかつたかもしれないぞ…」

「おお、アル大先生、その推理はいかほどに…？」

「龍殺しの実と毒テングダケ」

「…えええ？それを食べたからつてこと？」

「それしか無いだろ？今までの生活からその辺しか心当たりが無い」

「確かに…じゃあ、それを食べれば一回だけ攻撃に属性が乗るのかな？」

「多分なあ…。今度狩りをするときに確かめよう。そのために、食材探しに行くときは
その辺気にして探そくな」

「了解しました！・アル隊長！」

「で、アル：」

「ん？」

「このランポスたちの死体、どうしようかな」

あああ、どうしようか。

／＼＼＼＼＼＼＼＼

死体が二つ。遠くにもう一つ。

戦ったランポスの死体をどうしようかミツネと相談した。
腹は減つてないし、今は食べて供養することは出来ない。
肉を取つておくとして、放つておいてもいいのか。
元ハンターとして、一つ案が浮かんだ。

剥ぎ取り。

倒したモンスターから素材を得る方法。
ハンターの醍醐味の一つ。

しかし、モンスターの巣で見た、ハンターたちの剥ぎ取り後の惨状は心に来るものが
あつたし、ミツネはそれを見て元気を無くしてしまった。

「このモンスター達から素材を貰つて、供養しよう。」

同じ事を考えていたのか、ミツネからの提案だつた。

「いいのか？これは悪く言えばただの追い剥ぎだぞ。気持ちはわかるけどさ…」

「うん。わかつてゐる。でも、向こうも私達の命を奪おうと襲つて來たし、私達はそれに立
ち向かつた。戦つて、私達は勝つたんだよ。」

「殺したくて殺した訳じやない。でも、私達はこの子達の命を奪つた。だから、私達に出
来る供養は、この子達の持つてる物を活かして強く生きる事なんじやないかな。」

「そうか。強く生きる事か…」

「うん。体の良い言い訳だけど、この世界は弱肉強食だから。」

「わかつた。じゃあ剥ぎ取りをしよう。」

／＼＼＼＼＼＼＼＼

俺達は剥ぎ取りの為に動いた。ミツネは石を使って爪を折るようだ。そして俺は…

何も出来なかつた。

相当繊細な作業だつた。肉を噛みちぎる事しか出来ないので、素材を無駄にしてしまふ。細かい所をミツネが剥ぎ取つたら、皮や肉なんかを力技で分ける。剥ぎ取りナイフって偉大。

＼＼＼＼＼＼＼＼

大体剥ぎ取りは終わつた。ランポスの肉はに“ちょっと美味しい”と美食センサーが反応したので、いくらか集めた。

前の肉は”まあまあ見える”だつたけど、多分鮮度の問題なんだろう。早めに食べなきや。

で、剥ぎ取りの結果。

鳥竜種の牙×4

ランポスの鱗×7

ランポスの皮×1

竜骨 小×6

ランポスの爪×6

こんな感じになつた。本当はもつとあつたんだけど、石で無理矢理折つたりしたので割れてしまつたので、その分減つてしまつた。

皮は一つだけ上手くいつたものを回収。他は破れてしまつた。

剥ぎ取り制限も無いし。

「ふう…疲れたねえ。」

「ああ、気を使う作業は疲れる」

しかし、ミツネはしょんぼりしている。

「結構無駄にしちやつたね」

やつぱりその事か…

「剥ぎ取りナイフでもあれば良いんだけどな…」

「なんでも切り裂くあのナイフね…」

「刃物になる素材を集めないとだな」

「どうとう本格的にモンハンサバイバルの始まりだね」

「強く生きような」

「うん」

＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼

集めた素材をモスカバンに入れていたら、外は夕暮れだつた。
早速ランボスの肉を食べる。

お、ちょっと美味しい。

ミツネは…?

「おいしーーい！」

悪食め、なんでも美味そうに食べおつて。

羨ましい。

一幕 第九話

ランポスの群れと激闘を繰り広げた次の日。

今日も今日とて、採取である。

俺はモスカバンに、ミツネはランポスカバン（昨日の素材で作つた）に採取したものを入れている。

重点的に探しているのは、属性又は特殊要素のありそうな食材。龍殺しの実とか、毒テングダケとか。他にも、マヒダケ、ネムリ草なんかもどこにあるはず。

お、毒テングダケ見つけ～

「アルーーー！ 助けて～～！」

ミツネの声がする！ 何があつた！ どうした！

「どうした！ ミツネ！」

「くつづいて取れないよう…」

そこには岩の上に立ち、ぐらぐら揺れているミツネがいた。

「何してんの…」

「なんかベタベタしたもの踏んじやつて、岩で擦り落とそうとしたら離れなくなっちゃつた…」

「ええ…？ 何それ…」

「どうしよう…動けない…」
ぐらぐら。

「とりあえず靴脱いだら？」

「…はっ！ 天才ですかアルは！」

ミツネの近くへ寄り、靴を脱ぐための手摺の代わりになる。

ミツネはぐらぐらと揺れながら、白ジイから貰った靴を脱いだ。裸足で地面に立つ。
岩の上で残っている靴を落とそうと叩いてみるが、これまた驚き。本当にくつづいて
いる。それも結構ガツチリ。

「何踏んだんだよ、ミツネ。ガムでも落ちてる訳じやあるまいし」

「わからないけど、この辺かなあ。」

ミツネは裸足で足元を確認しながら歩く。

「ヒイイイー！ アルウ！」

ミツネがこちらへ飛んでくる。

本日二度目のミツネの悲鳴タイム。次はなんだろうか。

／＼＼＼＼＼＼＼＼

蟻だ。

それもちよつとでかい。大体人差し手のひら分くらいの大きさがあつて、体は黒い。
「でつかい蟻だ」

ミツネが恐る恐る俺の後ろから覗く。

「ああ、でつかい蟻だねえ」

「あれ、ミツネは虫平気なの？」

「うん。さつきは大きさにびっくりしちやつたけど、蟻だつてわかれれば特に怖くない
よ。」

「そうか。しかしなんだろうこの虫。でつかいクロアリだね」

ミツネは俺にまたがり、足に付いた土を払う。

こら、俺は椅子じやないぞ。

そのままデカクロアリを観察していた。ミツネは俺の上で起用にうつ伏せになる。

デカクロアリの方はと言えば、草木の枝を噛み切るほど強い顎の力があるようで、噛

み切つては運び、噛み切つては運ぶ。

運んだ先には、小さなドームの様な形のものがある。

「あれが巣なのかなあ」

ミツネが言う。

「そうなのかな、しかしそく作るなあ。」

「ね、私たちなんかいつもその場で野宿なのに」

「くう…アリンコに負けるとはなあ…」

なんてくだらない会話（実際死活問題だけど）をしていると、ミツネがボソッと言つた。

「よく崩れないね、あのお家」

そう言うのによく見てみると、確かにそうだ。明らかに崩れそうな位置に枝が置いてある。しかし、デカクロアリは

そのドームの上を悠々と歩き、枝を組んで行く。

「くつついてるのかなあ」

「アロンアルファでも持つてるんじやね？」

「あるわけないでしょ…！…でもそうにしか見えないよなあ。」

「接着剤か、あれば色々便利なんだけどな」
「接着剤ねえ……」

沈黙。

「ミツネ、俺わかつた。」

「奇遇だねえアルさんや。私もだよ」

「おやおや、奇遇ですなあ」

「じゃあ、せーの！で言おう！行くよ〜

せーの！」

「セツチャクロアリ！」

絶対そうだ。黒いし、蟻だし、くつつけてるし。

きつとミツネはセツチャクロアリを踏んで靴が岩に張り付いたんだ。そうと決まれば話は早い。

「ミツネ！捕まえるぞ！」

「がつてん承知の助〜〜！」

古いぞ、ミツネ。

／＼＼＼＼＼＼＼＼

カプツ

はあ、はあ、やつとだ…やつと捕まえた…
やたらすばしつこいセツチャクロアリをなんとか捕まえた。捕まえたと言うか、咥え
た。時間にして15分くらいかけて。

やつぱり虫あみは偉大なんだなあ。

「ひふへ、ふははへはほ」（ミツネ、捕まえたぞ）
咥えているせいで話せない。

「あはは、喋れないのかい、アルさんや」

「ふはへへはひへはふへへ」（ふざけてないで助けて
「こりや失礼しました。で、どこにしまう？」

虫かごなんて無いもんない…どうしよう？

すると、ミツネはランポスカバンからツタの葉を出し、葉っぱを千切つてツタにした。そのツタをセツチャクロアリに結び、殺してしまわないように縛つた。

「完成！ヒモセツチャクロアリー・アル、離していいよ！」

そう言うので、離す。

セツチャクロアリは、釣り糸に吊られる餌の様にぶらぶらとぶら下がっていた。

「おお、ミツネ、君は天才か！」

「へつへーんだー！讚えよー！敬えーーー！」

「ははーつーーーーー！ちよつと待つてミツネ、なんか口の中苦い。」

「これは…セツチャクロアリにやられたのか？接着剤を口の中にぶち込まれた…？」

「それ、やっぱいんじない？」

「やっぱい。」

急いで水場へ向かう。大体地理はわかるのでそこまで一直線で行く。

幸い、まだ粘着剤は固まつていなかつた。

口の中の違和感がなくなるまで何度も口をゆすぐ。

~~~~~

「さて、ここに骨の双剣とランポスの素材があります。」

「はい。」

「そして、我々は接着剤を手に入れました。」

「はい」

「それも結構強いやつ」

「はい。私の靴が犠牲となりました。」

「そうですね。残念な事です。」

「はい。」

「私はここで、一つ提案があります。」

「なんでしょうか。アル氏。」

「骨双剣に、爪と牙を貼り付けて強化してみませんか?」

「ただ、上手く行く保証はありません。」

「ものは試しです。やりましょう。レツツ3分クツキング!」

⋮絶対3分で終わらないけどね

⋮⋮⋮⋮⋮⋮⋮

ということで、出来た。釘バットならぬ牙爪バット。

今持っているモンスター素材をフルに使つて完成した。

セツチャクロアリのお尻を木の枝とかで叩いてやると、お尻の先から粘液を出す。それを爪と牙に付けて、骨双剣にくつつける。今は接着中。見た目は無骨だけど、まあ前の骨双剣よりはマシだと思う。

一応ダメージを与える為の道具だし。武器は。

その辺の魚を捕つて、昼食をとりながら接着剤が硬化するのを待つ。

「取れた―――!!」

ん？ ミツネは何してたの？

ミツネは岩に張り付いていた靴を回収した様だった。

回収した靴を天高く掲げている。

「おお、やつたな」

「よかつた～～片っぽだけしか靴が無かつたからなんかバランス悪くて。これで元どおりだよ～～」

ミツネから靴の裏を見せて貰う。

靴の裏には、ほんのすこしだけ、接着剤の跡があつた。  
直径1センチほどの跡。なんてこつた。こんな少量であんなに硬くくつつくの  
か。つてことは、新骨双剣も結構使えるかもな。

## 一幕 第十話

陽気にトゲール君キバール君を振りながら歩くミツネの後ろを歩いています。

トゲール君キバール君つて言うのは、ミツネが骨双剣に付けた名前。確かそんな名前の双剣あつたよなあ。

アイルー君メラルー君だつけ？

そういうえば、アイルーやメラルーをまだ見ていないな。  
一度見てみたい。

「おつ！これは龍殺しの実だ！」

「結構集まつてきたな」

「うん！実験出来る分は集まつたよ！」

「じゃあ狩りに行こう。」

「はーい！」

昼食は双剣を作りながら食べたから、夕食探し。  
アプトノスがいればいいんだけど。今の宿敵だし。

~~~~~

て事で、やつてきました森丘1番。

アフトノスが二頭いる。

で、狩りに出る前にやらなきや事がある。すぐ近くにベースキャンプがあるから、一度見に行つてハンターが居ないか確認するのだ。

周りの安全が第一ですよ。ええ。

ミツネを背に乗せて、ゆっくりと歩く。

俺は前を、ミツネは後ろを見る。

~~~~~

特に何も無かつた。

誰も居ないし、無人のベースキャンプがそこにあつた。

ミツネはまた支給品ボックスを覗いている。

「アルーー・こんなのがあつた!」

ミツネは、ピツケルを持っていた。しかし、ボロくて少々建付が悪い。すぐに壊れそうだ。

「見た目は100%ボロピツケルだな。」

「貰つて帰ろう！」

「まじで？ でも、必要になるよなあ…」

「内緒だよ」

「おう」

告げ口をする相手もいないが、盗みは盗みだ。内緒にしなきや。しかし！バレなければよかろうなのだ!!

~~~~~

アプトノス。

弱いけど、今の俺たちには強敵。

ランボスマッタに体が小さくないから、関節技で一撃必殺も出来ない。で、ミツネの実験をしてみようつて事だ。

2頭いるけど、食べきれないでの一頭集中で狩る。

まず、ミツネは毒テングダケを食べた。

そして、アプトノスの後方から切り込む。

ザンツツ！

おお！切れてる！ちょっとだけ浅い傷が出来てる！

で、紫色の靄も出てる。

そのまま続けて二撃目。

ザツツ！

おお、切れてるよ。ミツネさん。

そこで、紫の靄は出なかつた。アプトノスもミツネを敵と認識したのか、威嚇をしている。

「次行くよ～マヒダケ！」

と言うと、ミツネはマヒダケを一つ食べる。

そして、

ザンツツ！

黄色い雷の様なエフェクトが出た。結構派手だな。

一撃毎にアイテム使つるけど、今回は実験。

なんて思つていると、アプトノスがビクビクしながら立ち止まつた。
嘘だろ、マヒダケドーピング一発で麻痺かよ！状態異常値が高いのか？にしたつて早すぎる。確定蓄積？

いやいや、双剣で確定蓄積なんかしてみろ、ぶつ壊れもいいとこだ！

「アル！なんか麻痺つた！」

「ミツネ！今のうちだ！頑張れ！」

「わかつた！そいや――――！」

ズババババ！

鬼人乱舞していた。いや、鬼人化のやり方がわからないから出来ないんだけどさ。見
よう見まねなのかな。でも、結構様になつてる。

ここで、アプトノスの麻痺も解ける。

続けてアプトノスは倒れた。でも、まだ討伐出来ていない。

バタバタと暴れるアプトノスから、一度ミツネは離れた。

何やら^{ごそご}そとランポスカバンを漁つている。次は何を出すつもりだ？

「テレレテツテレ〜〜！」

ニートーローダーケ〜〜〜〜！」

「ちよつ、まじで!?爆発するかもだぞ!?

「大丈夫だよ、多分！」

パクツッ！

やつばいな、どうなるんだこれ？

思うのも束の間、容赦なくミツネはアプトノスへ切り掛けた。
バアンツツツツ！

爆発した。結構豪快に。

「うるさつ！」

ミツネは驚いて尻餅をついた。

「おいつ！怪我は無いか？大丈夫！？」

「うん！大丈夫！耳がキーンつてするけど。」

「そうか…良かつた…」

「あ…！アプトノス倒しちゃった！まだ試したい実があつたのになあ…」

ミツネさん…なんか戦闘狂じみてません？

「まあ、次の狩りで使おうよ。すぐには腐らないだろうし。」

↓↓↓↓↓↓↓↓

とりあえずアプトノスがを捌く。

ミツネのトゲールキバールで皮を切り、そこをきつかけに肉と皮を別ける。力技だけ
ど。

「そろそろちゃんとしたんナイフが欲しいねえ。」

「そうだな、綺麗に捌けた試しがない。」

やはり、力技で捌くと皮が千切れてしまつたり、肉が皮に残つてしまふ。勿体無いし、命に申し訳ない。

「人がいる所に行くべきなのかな？」

そうなるよなあ…俺らには鉄の加工は出来ないし…

「だよなあ…」

~~~~~

ひとまず、大きな肉が塊で一つ取れた。

今日の夕食で食べ切れそうも無いけど、とりあえず背負つて持ち帰る。

ミツネは側に置いていたランポスカバンとボロピツケルを持ち、落ち着ける場所を探す。

「ねえ、アル。」

「ん? どうした?」

「こつちから行けば森丘の9番に行けそうじゃない?」

いつもならマップがない場所へ向かうのだが、ミツネがふと言い出した。

「ああ、行けるだろうけどどうしてまたそんなことを？」

「メラルーがいるかも」

「なるほど。見てみようつてか？」

「うん。モンハンの癒し要素だもん」

「オッケー！ 行つてみよう。」

ということで、一人と一頭は1番から森へ入つて、9番を目指す。

↓↓↓↓↓↓↓

結構歩いた。

1番から8番までで結構距離があつて、生い茂つてわかりづらい道を進まなければならぬ。森が少し開けると、中心に大岩のある空間へ出る。ここが8番。

そこから9番のあろう方向へ行き、とりあえず直進する。

生い茂つてはいるけど、何となく道っぽくなつていて、そこを道なりに進むだけ。

探索ではなるべく迷わない様に歩いていたが、ここまでわかれば8番へ戻る道もわからぬし、迷子にはならないで済みそう。

「あつ、アル！ 多分ここ9番だよ！」

「やつと着いたのか？」

「多分そう！トンネルもあるし、あつちには池もある！」

そこは間違いなく、森丘9番だつた。

そして、目線を下げるとき、彼らはいた。

「メラルーだあ！」

# 一幕 第十一話

メラルー。

いたずらつ子だけどなんか憎めない憎いヤツ。  
3匹でウロチョロ何かを物色してる。こつちには気付いていないようだ。  
ミツネが俺の方へ身振り手振りしている。

(いたあー！メラルーだよお！アル！)

そんなことを言っているんだろうなあ。

(おう！静かに観察しよう！)

伝わっているかは分からぬが、ミツネは草の影へ隠れ直した。どうやら伝わった様だ。

…しかし、かわいいなあ、メラルーは。

戦闘中にアイテム盗まれたりすると、本氣でイラッとするけど、遠目に見てれば單なる歩く猫だ。これは飽きないぞ。

~~~~~

しばらく観察していたら、ミツネがコソコソと俺の所へ来て、耳打ちする。

「あの子達はお話出来るのかな?」

やつぱり気になるよなあ。

「どうだろ? 話しかけたとして、襲われたら面倒臭いしなあ」

「アルさんや、わかつてないねえ。」

「ん?なんか案でもあるのか?」

「これだよ、これ。」

ミツネはランポスカバンから何やら草を出した。

それ、もしかして…

「うしししし、マタタビだよ」

その時だった。マタタビの匂いに気が着いたのか、メラルー達がニヤーニヤー鳴きながらこつちへ走って来る。なかなか迫力がある。どのメラルーも死にものぐいの表情だ。

「あわわわわわわ!ごめんなさい!あげるから!あげるからあ!」

ミツネが迫力に負けたのか、メラルー達へ向けてマタタビを放った。そして3匹は、

一つのマタタビを取り争つて喧嘩を始めてしまった。

「あうあ…どうしよう…喧嘩してるとおも私のせいだよね…怪我しちやうよ、やめてよ
～」

「いやあ、無理だろうなあ。猫のマタタビ愛は異常だもんなんあ。」

「アルウ！そんな優しい目で見ないでえ！」

「いやあ、猫の喧嘩を止めようとするミツネを見るとねえ、なんかサバイバル忘れちゃ
うなあつて。」

「そんな事言つてる場合じやない～」

「あはははは。」

戦う猫と、焦るミツネを見ていたら、トンネルの奥からアイルーが現れた。
「ニヤー二ヤニヤニヤ、ニヤー！」
なんか言つてる。

～～～～～～

遠くからゆつくりと歩いて来るアイルー。どんぐり装備かな、なんか着てる。どんぐり君と呼ぼう。

ニヤーニヤー言いながらこちらへ来るけど、さっぱりわからん。さっきまで喧嘩してたメラルー達も喧嘩をやめて、こちらへ来るどんぐり君を見ている。

「ミツネ、なんて言つてるかわかる?」

「ううん、わからない。なんかニヤーニヤー言つてるだけ」

「さすがに猫の言葉は分からぬいかあ」

どんぐり君がメラルー達からマタタビを取り上げた。

うわ、こいつそれが目当てかよ、ゲスだな。

だが、どんぐり君はマタタビに目もくれずマタタビを3つに割き、1／3のマタタビをそれぞれ1匹ずつへ渡す。

ごめん、ゲスつて言つて。

どんぐり君が「ニヤ。」と言うと、3匹のメラルー達は地面へ潜つてどこかへ行つてしまつた。どんぐり君カツケエ。

どこかへ行つたメラルーを確認すると、どんぐり君は俺たちの所へ来て、さっきまでのニヤーニヤー語とは違う、何らかの言語を話し始めた。

「%%%%<+€*\$==\$\$」

は？なんか言つてるけどわからん。

「なんか言つてるのかな、もしかしてミツネはわかる？」

「なんか盗まれたものはあるかつて」

「いや、無いな。マタタビくらいだ」

「わかった。」

そう言うと、ミツネは

「* € <> \$ % • • * * >< . * * € \$ € *」

「ちょっと待て、ミツネさんや」

「どうしたの？」

「なんでモンハン語喋れるの？」

「わからないけど、白ジイの力なら考えたら負けかなって思つて考えるのを辞めたの」

「あーーー、わかった。ミツネが全面的に正しい。俺も考えるのやめるわ。ごめんな、話

の腰を折つて。続けてくれ。」

「はーい。ちょっと待つてね」

~~~~~

ミツネとどんぐり君は話を始めた。

マタタビの件の事を話しているのか、どんぐり君は申し訳なさそうに頭をポリポリと搔いた。ずいぶんと人間っぽい仕草をするんだなあ。

ミツネも、笑つたり驚いたりしながら話している。

ちなみに、もし俺たちの過去、出身とかを聞かれたら、

【暮らしていた集落がモンスターに襲われて、逃げてきた。その頃の事はよく覚えていないし、どの様な道のりでここまできたのかもわからない。だから村の場所もわからない。アルはミツネのペツトで、ずっと一緒に暮らしていた。なんでか話せる。】

と言う都合の良い設定をミツネと作つてある。

ハンターを見たあの日、もしもこの先俺たちが捕まるとか保護されるとか、強制的に人間のいる場所へ連れていかれてしまった場合の為に作ったものだ。

幸い俺はモンスター（ペツト）だし、ミツネは小さい女の子（見た目は）なので、無理な設定でもなんとか押し通せるだろうって事で、こんな設定が決まった。

もし、どんぐり君に聞かれてもミツネはその設定から話してくれるはずだ。

とか考えていたら、ミツネの声色が少し変わった。辛い事があつた時になる様な声

だ。何を話しているんだろう?

～～～～～～～

『ミツネとメラルーの会話。モンハン語。』

なんで白ジイはアルにもモンハン語わかる様にしてあげなかつたんだろう?  
とりあえず、この世界では始めてのアル以外の相手とお話だよ。緊張するなあ：

「さつきはマタタビを盗られたくらいだよ。でも使い道も無かつたから大丈夫。」

「マタタビの事はごめんニヤさい…ボク達はマタタビを見るとなか止まらニヤいんだニヤ。ボクは鍛えたから耐えられるけど、野良のメラルーには耐えられないんだニヤ。」「大丈夫だよ！もう一個あるから、アイルー君にもあげようか？」

「本当かニヤ！？……い…いや、遠慮するニヤ。本当に止まらないんだニヤあ…できればしまつておいて欲しいニヤ」

「わかつた。閉まつておくね」

「そうだ、私はミツネ。君はなんて言う名前なの？」

「ボクの名前かニヤ？うーん、…まあ、それは後で良いニヤ。ミツネ殿達はクエストの途中じや無いのかニヤ？こんな所でボクの話してると時間がもつたいた無いニヤ」

なんで名前教えてくれないんだろう？もしかして名前がないのかな？

「ううん、私達はハンターじゃないんだ。今は放浪してるの。」

「ハンタージャニヤい？じやあなんでここにいるニヤ？もしかして密漁者かニヤ？」

「違うよお！私のいた集落がモンスターに襲われて、なんとかここまで着いたの。集落の場所もわからないし、しようがないからアルと一緒にサバイバルしてるの。」

嘘をついた…しようがないけど、会話の出来る相手に対して、転生したなんて言つて

も信じて貰えないと思う。ごめんね、アイルー君…

「…それは気の毒だニヤ…密漁者なんて言つてゴメンニヤ」

「いいよ、しようがないもん」

「立派だニヤあ…所でのモンスターは何だニヤ？やけにミツネ殿に懷いてるみたいだニヤ」

「彼はアルだよ。何のモンスターかは知らないけど、ずっと一緒にいるの。サバイバルでもいっぱい助けてくれて、すつぐく頼りになるんだよ！」

「ほえー、仲良しなんだニヤ。でも始めてボクらや奇面族以外で話をするモンスターを見たにや。まあ、さつき何か話していくけどさっぱりわかららニヤかつたけどニヤ」

あ…この世界ではアルが喋ってる事も、もしかしたらおかしい事なのかも…とりあえず誤魔化そーつ！

「アルは優しいんだよ。私のわがまま聞いてくれるし、助けてくれるよ」

「仲良しは良いことニヤ。と言うか、ミツネは随分と荷物が少ないニヤ。カバンとボロピッケルだけたニヤんて…よくそれでサバイバル出来るニヤ」

「あはは、何とか生きてるよ。君はサバイバルに詳しいの？」

「まあ、昔はハンターのオトモしてたからニヤあ。それなりに知識はあるのニヤ。」

「すごい！ オトモつて大変なの？」

「オトモに着くハンターによるニヤ。気に入られると沢山戦つて強くなれるし、気に入られないとひたすら雑用ニヤ。」

「へえ～。じゃあ、オトモに行つてたつて事は、気に入られてたんだ？」

「それはそれでいろいろあるのニヤ。ボクが自分の名前を嫌いなのも、今こうしてここにいるのも、全部ハンターのせいなのにや。」

「…なんだろう…？ ハンターのせい？」

「元ハンターとして、心を決めて尋ねる。

「…聞いてもいい？」

「もし、ミツネ殿がハンターになつたとして、オトモを大事にするつて約束してくれるなら、話すニヤ。」

少し引っかかる。ゲームの中で私はオトモに優しかったのかな?

今、ハンターになるつもりは無いし、なつたとしても雇うつもりも無い。ただ、覚悟は決める。

「…わかった。約束するよ。」

＼＼＼＼＼＼＼＼

どんぐり装備に身を包んだ、森丘で出会ったアイルー。

彼はまず、自分の名前を言つた。

「ボクの名前は、”挑発＆回復笛” だニヤ。」

# 一幕 第十二話

「ボクの名前は、”挑発＆回復笛” だニヤ。」

余りにも、冷たい名前だった。

ハンターが管理する為だけの名前だと思つた。  
大体予想はついた。ハンターからの扱いや、どういった立ち回りでオトモとして働いていたのか。

ハンターに管理されて、技やスキルを決められて、働いていた。

彼の名前を聞いただけで、全てわかつてしまつた。

それから彼は自分の一生を話し始めた。

＼＼＼＼＼＼＼

ボクは元々、ネコ嬢の元で生まれたんだニヤ。オトモを引退したお父さんとお母さんの間で産まれて、ネコ嬢に色々な事を教えて貰つたニヤ。その時は”ドン”って名前を

貰つたニヤ。

それから、沢山戦う練習や特訓をして、防御が得意なオトモとしてネコ嬢からハンターを紹介して貰つて、雇われたんだニヤ。

最初はモンニヤン隊で旅に出たり、交易で色々なアイテムを作つたり集めたり、沢山働いたニヤ。たまにご主人がアキンドングリをくれて、とっても嬉しかつたニヤ。でも、ある時ご主人から装備を貰つて、技やスキルを決めて貰つて、新しい名前を貰つたニヤ。

その時の名前が、”挑発＆回復笛”だニヤ。

ご主人はいつも採取クエストの時にボクをオトモに連れていつてくれたニヤ。ボクは挑発の技を使えるから、ご主人の所へモンスターが行かない様に、安全に採取出来る様にいっぱい働いたニヤ。コレクトが得意なオトモに採取では敵わなかつたけど、いっぱいアイテムも集めたニヤ。

ボクはご主人の役に立てているのが、凄く嬉しかつたニヤ。

そして、半年くらい前にクエストで森丘へ来て、ハンターさんは鉱石を集めてたニヤ。そうしたら、奴が来たんだニヤ。

火竜、リオレウス。

奴はご主人を狙つて攻撃したニヤ。

ボクの仕事は、挑発をする事。

一生懸命挑発をして、リオレウスの注意を引いて、ご主人に逃げる様に言つたニヤ。ご主人はモドリ玉でキヤンプへ戻つて、ボクも追いかけようとしたのニヤ。

そうしたら、リオレウスに捕まつてしまつたのニヤ。地面に潜れれば逃げられるのに、リオレウスはボクを掴んで空へ飛んでしまつたのニヤ。必死にもがいて、リオレウスの足からやつと逃げることが出来たと思つたら、そこは空の上ニヤ。いくらボクがアイルーとは言え、着地した時に足を怪我したのニヤ。

回復笛を吹こうかと思つたけど、回復笛を使う程の体力も無い。仕方なく、ゆっくりになつてしまつたけれど、なんとか穴を掘つてベースキャンプへ向かつたニヤ。でも、

ベースキャンプには誰もいなかつたニヤ。

でも、

最初は何も思わなかつたニヤ。疲れてたからベースキャンプで寝ていれば、ご主人が迎えに来てくれるかと思つていたニヤ。

でも、朝になつても誰も来なかつたニヤ。

追いかけようと思つても、ご主人の気配も匂いも感じない。

もう、わかつて いたニヤ。

待つていても、誰も来ない。

それも、わかつて いたニヤ。

全部、全部、わかつて いたニヤ。

そうしたら、お腹が鳴つたニヤ。

ぐうーーと鳴つたニヤ。今まで はご主人の許可を貰つて、ご飯を食べていたのに、今はご主人がいなから許可を貰えない。ご飯を食べたいけど、食べていいのかわからな  
い。

ぐうーー…

ぐうーーー…

そしたら、一つ、わかつたのニヤ。

そつか、ボクは、”道具”だつたんだニヤあ  
ボクは、”挑発&回復笛”つていう、”道具”だつたんだニヤあ…

涙が止まらなくなつちやつた：

なんでそんなに単調に話すの？あなた自身の事なのに：

「なんで泣くのニヤ?」

「……だつて……だつて……」

「ボクはオトモだつたのニヤ。」  
ハンターが決めたのだから、従う。それがオトモの常識ニヤ。

「なんでよ！もつと自由にしたらいいじゃん！」

「ハンターも生きるのに必死なのニヤ。」

「なんで……なんでよ…」

「いいのにや。ボクは自分が道具だとわかつた時に、悟つたのニヤ。これからは野良ア  
イルーになつて、適当に生きるつて決めたのニヤ。」

「やだよ……そんなの……ひどいよ……」

二ヤハハ 案外野良も楽しいのニヤ!!

「でも……それじゃあ救われないよ……」

「今はメラルー達にいろいろ教えているのニヤ。防御のやり方とか、アイテムの集め方

とかニヤ」

「君は……」

「みんな頭は悪いけど、昔のボクを見ている様で楽しいのニヤ」

「君は……！」

「みんなボクを慕つてくれるニヤ。悪さはするけど、とつてもいい子達のなのニヤ」

「君は……！悲しく……無いの？！」

感極まつて大声を出した。

後ろにいたアルが、「どうした？」と聞いてくるけど、「大丈夫だから」と言つて制止した。

余りにも、イルー君は自分の今までを淡々と話した。

未練なんてない。恨みもない。自分の過去に興味が無い。

そんな風に見える様に話していた。

でも、

澄ました顔で淡々と話す彼の、小さな拳が小刻みにプルプルと揺れていたのが、彼の隠し切れない気持ちの全てだと思つた。

だから、彼に悲しく無いのかつて聞いた。

＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼

「悲しく無いかって？ 酷なコトを聞くのニヤ。ミツネ殿は…。悲しみなんて無いニヤ。  
ボクに残っているのは、ハンターと過ごして得た知識と、適当に暮らす事だけニヤ」

「本当にそれでいいの？」

「それで…良いニヤ。」

「本当に、それでいいの？」

「良い…ニヤ。」

「…本当に？」

「しつこいニヤ！ 良いつて言つてるニヤ！」

「じゃあなんで君は泣いてるの…！」

ふと、アイルー君の動きが止まつた。

前脚を目当てて、肉球に着いた自分の涙を見る。

「アレ…？ ニヤんだろう…？ これは…」  
「涙だよ。泣いた事無いの？」

「うん…目から水が出たのは初めてニヤ…」

「生きているとね、悲しい事、たくさんあるんだ。その気持ちが溢れちゃうと、涙になるんだよ」

「ボクは今、悲しいのかニヤ？」

「……ほらあつ！うじうじしないッ！泣くんなら泣いて、全部出しちゃえばいいの!!私が  
だつて、そうやつて生きてきた!!」

「ボクは…ボクは…」

／＼＼＼＼＼＼＼＼

アイルー君がわんわん泣き出した。

それを見て、私も涙が出てくる。

ずっと溜めていた彼の気持ちが、私の中に流れ込む。

アルは戸惑っているけど、今はアイルー君の味方。ちょっと待つてね。

# 一幕 第十三話

何？何？なんなの？

ミツネとどんぐり君が話してると思つたら、いつの間にかどんぐり君がずっと話していく、ミツネは静かに聞いている。ここ、一応モンスターも通るフィールドなんですよ。

そう思つて、おれなりに警戒しながらミツネの隣で話を聞く。何言つてるのかさっぱりだけど。

しばらくしたら、ミツネが泣き始めた。

どんぐり君、君はミツネに何をした？

かと思つたら、ミツネがいきなり大声をあげた。

ミツネに「どうした？」と聞いたが、「大丈夫だから」と制止されてしまった。

何が何やらさっぱりわからん。

オロオロとミツネとどんぐり君の様子を見ていたら、今度はどんぐり君が泣き出しだ。

ほえー？ 今度は何だよ。

とりあえず、二人（一人と一頭？）は、大事な話を終えたのか、ずっと泣いている。コラコラ、俺はタオルじゃないぞ、涙を俺の体毛で吹くな、ミツネさん。

：どんぐり君までなんで俺の体で吹いてんの？ ミツネはいいけど、どんぐり君はどんぐり君で自分の体毛あるでしょ？

「で、ミツネさん、話はどうだったの？」

「えつとね、話すと長いんだけど：ちよつと待つて、アイルー君に話して良いか聞いてみる。」

そう言つて、ミツネはどんぐり君と話をする。そんなに秘密にしたい様な内容なのかな？

「話して良いよだつて。結構長いし悲しい話だよ？」

「…わかつた。聞かせてくれ」

／＼＼＼＼＼＼＼＼

ああああああ！

悲しい！悲しいよ！

なんだよどんぐり君…そんな悲しい過去があつたのか…頑張ったんだなあ…

「ミツネ、俺達でどんぐり君にしてあげられる事は無いかな？」

「うーん、なんだろう…。…ん？どんぐり君って誰？」

そうだ、勝手に変な名前付けてたんだ。

「いやあ、どんぐり装備着てるから、なんとなくそう呼んでた。挑発＆回復笛つてのは嫌だし」

「なるほどねえ。かわいい名前だねえ！どんぐり君！……そうだ！どんぐり君に、名前をあげよう！どんぐり君つて名前！」

「そんな今さつき会つた奴に名前貰つて嬉しいかなあ？」

「挑発＆回復笛よりはずつと良いでしょ！思い付きかもだけど、優しくて、良い名前だと思つたもん！」

「わかつたわかつた。じゃあそうしよう。」

「ちょっと話してくる！」

健気だよ、ミツネさんは。

どんぐり君、喜んでくれるといいなあ…

～～～～～～

『モンハン語での会話』

「ねえねえ、アイルー君！」

「ニヤンだ？ 何やらアル殿と盛り上がつてたニヤ？」

「うん！ アイルー君に、何かしてあげようつて話してたの！」

「ニヤ…？ 別に何もいらニヤいぞ？ 生活には困つて無いニヤ。」「そーゆー事じやなくてえ！」

「じゃあ何だニヤ…？」

「アイルー君に、プレゼントがあります！」

「マタタビはいらんニヤ」

「違う…！ アイルー君にね、名前をあげたいの！」

「ニヤア…？ 名前……？」

「うん！ アイルー君とは友達になつたけど、アイルー君つて呼ぶのは何か味気ないし、前の名前も嫌なんでしよう？」

「まあ、ボクはアイルー君でも良いけどニヤ。それに前の名前は今さつき捨てたニヤ。」

「わかったニヤ。とりあえず聞くだけ聞くニヤ」

「やつたあ！えつとね、アイルー君の名前は…」  
「早く言うニヤ…」

「どんぐり君！」

「どんぐり君…それがボクの名前かニヤ？」

「うん！……ダメかな？」

「ニヤハハハハハ！良いニヤ！気に入ったニヤ！アキンドングリは大好きだし、装備も  
どんぐり一式！ボクにぴったりの名前ニヤ！」

「本当に?!良かつた～！」

「どんぐり君かニヤ：名前を貰つて、ここまで嬉しいなんてビックリニヤ…」

「よろしくね！どんぐり君！」

「あいニヤ！よろしくニヤ～、ミツネ殿～！……あれれ、また涙が出てきたニヤ…？今は  
悲しくないのに、なんでニヤ？」

「それは嬉し涙だよ！嬉しくつて楽しくつて、涙が溢れちゃう幸せな涙だよーーー！」

「ニヤんだってえ！そんな涙もあるニヤか…うう…涙が止まらないニヤ～～！」

「あははは！どんぐり君、かわいい～！」

～～～～～～

ミツネがどんぐり君に名前をプレゼントしに行つて少し。

ミツネはどうやらどんぐり君に名前をあげるのに成功したみたいだ。そしたら、どんぐり君は泣き始め、ミツネは騒ぎはじめた。ついていけない、この状況。

ミツネは笑つてるし、どんぐり君は笑いながら泣いてる。

あのー、ここ、一応ファーリードなんですが…あれれ…

俺、置いてけぼり?

～～～～～～

「ミツネ、今日はここまでにして、俺たちは寝ぐらを探さないと。夕飯もまだだし。また明日、ここに来よう。」

「もうそんな時間?わかつた。待たせてごめんね、アル。」「気にすんな。どんぐり君もまた明日な」

「\* \$ % < • + • % \* • \$ • > !」

ミツネはどんぐり君にモンハン語で話しかけた。多分、また明日！とか言っているんだろう。

俺はモスカバンとボロピツケル、みはランポスカバンを持つて、歩き出した。すると、「俺はモスカバンとボロピツケル、みはランポスカバンを持つて、歩き出した。すると、

どんぐり君がなんか言つている。

「アル、どんぐり君が、私たちにどんぐり君の家を紹介してくれるって。狭いけど私たちなら入れるし、良ければ使つてくれニヤ。つて言つてるよ」

「まじで？ ちょっと寄つてみようか」

「わかつた。伝えてくる！」

ミツネがどんぐり君に何やら話すと、どんぐり君は手招きしてテコテコ歩き出した。

遠いのかな？

にしても初めて本物の招き猫を見たよ。

お腹も減ってきたし、そんなに遠く無いと良いんだけどなあ：

／＼＼＼＼＼＼＼＼

近かつた。

森丘9番、トンネルの途中にある小さな抜け穴、そこの先にどんぐり君の棲家はあつた。

何やら物がゴチャゴチャ置いてある。

広くは無いけど、充分に俺たちが寝るスペースもありそうだ。いいなあ、どんぐり君。良いところ住んでるじやん：

↓↓↓↓↓↓↓

どんぐり君とミツネ、そして俺。みんなで肉を食べながら話をした。どんぐりハウスは結構居心地が良い。

ミツネの通訳を通しながらだったので、変な会話だつたけど、たくさん話をした。  
通訳お疲れさん、ミツネ。

# 一幕 第十四話

とりあえず、昨日はどんぐり君ハウスで一泊。いつもよりぐつすり眠れた。どんぐり君は夜行性みたいで、しばらく起きていたようだ。

俺とミツネの目が醒めた時、どんぐり君は寝ていたのでちょっと出かける。と伝え、ミツネといつもの様に食材集め。どんぐり君ハウスへ戻ると、どんぐり君が起きたので、食事を取りながらどんぐり君といろいろ話した。

ミツネに通訳をして貰つて、ハンターの生活とか、いろいろ聞いた。やつぱりゲームの世界とは違つて、この世界にはこの世界の仕組みがあつた。

＼＼＼＼＼＼＼＼

まず、クエストについて。

クエストは基本的に半日から2日かけて行う。簡単なクエストなら半日で済むが、難易度や討伐対象によつては2日かかる。

送迎船でフィールドまで向かい、モンスターを捜索して、ペイントボールを付ける。そこから戦闘開始となり、逃げられたり自分が離脱したり、沢山の行程を経て進行する。モンスターに逃げられると、またペイントボールを頼りに捜索し、時間は過ぎる。搜索だけで半日費やす事もザラにあるそうだ。

討伐に成功すれば、剥ぎ取りを行い、信号弾を発射する。その後ベースキャンプへ戻り、送迎船を待つ。

欲しい素材があれば討伐後にしばらく採取も出来るが、クリア後の報告などもしなければならないので、手短かに済ませて、帰還する。

大型モンスターの討伐の場合は、送迎船にギルド員が搭乗しており、討伐したモンスターをギルドが回収して、送迎船へ積み込み、帰還先で解体されて報酬となる。

捕獲の場合は、送迎船と別に捕獲用回収船が来て、そちらへ積み込む。

捕獲の場合の報酬は、基本的に多額の金銭となる事が多いらしい。そりや生け捕りにしたモンスターを解体したら死んじやうから、当たり前といえば当たり前なのだが。

クエスト受注時、契約金を払うが、その中にネコタクシーの依頼金も含まれている。ネコタクシーは保険のようなもので、ハンターを戦線から離脱させるプロフェッショナルである。ハンターが戦闘不能になつた場合、サツとネコタクシーが現れ、ベースキャ

ンプまで運んでくれる。

これが非常に重要で、もしもネコタクシーが無ければ、戦闘不能になつたハンターはそのままモンスターの追撃を受けて命を落としてしまう。

そのためのネコタクシーである。

もしも、密漁などでフィールドに無断で入つた場合、発見されれば捕まるのは勿論のこと、モンスターに遭遇して戦闘不能となつても、助けてくれるネコタクシーは居ない。よつて、死ぬ。ネコタクシーは受付を通さなければ依頼出来ない為、密漁＝ミスしたら死。となり、一種の犯罪防止策になつている。

しかし、即死の場合もある。

その場合、ネコタクシーは遺体を乗せ、ベースキャンプまで運ぶ。

採取や納品クエストの場合、納品ボックスへ指定アイテムを納品、信号弾を打ち上げてクエストクリア。

討伐クエストの途中で清算アイテムがある程度入手した場合、一度アイテムポーチの整理を兼ねてベースキャンプへ戻り、アイテムを納品してポーチの空きを作り、もう一度フィールドへ出る。

実際、アイテムポーチはそこまで大きく無いし、こまめに管理をしないと大変な事になるらしい。

ここまでがクエストの全体的な流れ。

~~~~~

で、この後が1番重要。ハンターの生活について。

これを知る事が出来れば、人里へ行く事も視野に入れる事が出来る。

ハンターにもよるが、みんなクエストを達成して、10日ほど休んで次のクエストへ行くらしい。

どんぐり君の元ご主人は、生活費が減つたらクエストへ行き、稼いだお金で暮らし、また減つたらクエストへ。そんなスタンスだつたらしい。

元ご主人の実力は平凡そのもの。難易度の高いクエストには行かないし、勝てない相手には挑まない。そんなハンターだつたそうだ。

他にも、ハンターになりたての新人は、頻繁にクエストへ行かないと生活出来なかつたりするし、噂では一年に一度だけ超高難度クエストへ行き、その報酬で暮らすハンターもいるらしい。どんぐり君自身も会った事すら無いそうだが。

ハンターは二種類いて、村を拠点として、その村へ来た依頼をこなす者、集会所へ所

属し、集会所へ来た依頼をこなす者がいる。

村へ来る依頼は、比較的難度の低いものが多く、依頼そのものも少ない。のんびり暮らすハンターは村へ住み、クエストをこなして生活する。クエストを進めることで、村の発展にも繋がり、それに喜びを感じるハンターも多いようだ。

変わって、集会所へ来る依頼は低難度から高難度まで幅広くあり、クエスト自体の量も沢山ある。こちらは一人から四人のパーティでクエストに出発する事ができて、欲しい素材を求めて他のハンターの助け合いながら生活する。

狩人としての村ハンター、

戦人としてのギルドハンター。

といった具合である。別に村ハンターが集会所のクエスト受注してはならないと言ふ訳でもなく、各々自由に受注する事が出来る。

どんぐり君の元ご主人は、村ハンターだつたそうだ。

＼＼＼＼＼＼＼＼

※ミツネが通訳しています

「なんでそんなにいろいろ聞くのニヤ？ハンターにでもなるのかニヤ？アル殿は：」

「いやあ、何となく気になつてさ。今まで集落で暮らしてたから、ハンター達はどんな生活をしてたんだろう？つて」

「ニヤヘー！殊勝なモンスターだニヤ。アル殿は」

「でも、どんぐり君も物知りで凄いね！」

「ミツネ殿、このくらいオトモには常識ですニヤ。知らないとハンターの役に立てないのニヤ」

「あはは、でもでも、どんぐり君も充分殊勝だよ。」

「褒めたつて何も出ないニヤ。そうだ、話してもあれだし、ちょっと出かけようニヤ！」

「出かけるつて、どこへ？」

「手合わせしようニヤ！」

ええ…？手合わせ…？

お互いの実力を測る的な？

「まじで？痛いのは嫌だぞ…」

「だから手合わせだニヤ。相手を仕留める直前でやめて、お互いの良いところや悪いところを教え合うんだニヤ。よく友だちのアイルーとやってたんだニヤ！」

「それに、ボクは防御が得意ニヤ。元オトモとして、そこだけは譲れないのニヤ。だからアルとミツネの攻撃も受け止められれば良いし、受け止められなければボクの実力不足ニヤ。そうやってボクは強くなつたニヤ。」

カツコいい：

素直にそう思つた。武人としてのプライドがあつた。

「ミツネ、どうする？」

日本語で、ミツネに尋ねる。

「…うーん…どんぐり君は私より強いと思う。今まで何回か狩りをして来て、私は弱いと思つた。だから…」

「うん。俺も同意見だ」

「やろう！」

俺たちは、初めて、強くなるために戦う。